親鸞仏教センター連続講座

「親鸞思想の解明」〈第１回〉

浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―

本　多　弘　之

本多弘之所長

当センターでは、「親鸞思想の解明」と題する連続講座を開催することになった。この講座は、各分野の有識者の方々を招き、親鸞聖人の思想に依って生きることの意味を所長・本多弘之が「問題提起」として発題し、親鸞仏教を基盤とした相互交流をとおして、現代社会の苦悩とともに歩む場を開こうとするものである。その第１回が、11月27日に東京国際フォーラム（有楽町）において開かれた。問題提起の一部を紹介する。（越部良一）

講座の開設に向けて

現代社会の生活空間には、いわゆる既成仏教が直接発言できる場所は、ほとんど見当たらない。それは仏教側に、時代社会に訴える情熱や努力がないということもあろうが、それよりも、時代社会の方に宗教を必要とする場面がなくなったのであろう。つまり、「非宗教的時代」になったのである。換言すれば、いわゆる「世俗的」なるもののみが、社会生活の圧倒的関心事となっているのである。「聖なるもの」とか「清浄なるもの」とか「人間を超えたもの」とかは、現代の文明社会の表面からは、ほとんど忘れられたのである。

しかし、人間が有限であり、自己の存在の意味に苦しむものであり、単に世俗の物質的豊かさで満足成就するものでないことは、時代が変わっても少しもかわらない人間の本質である。そこに、親鸞聖人の「非僧非俗（ひそうひぞく）」の人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こすべき課題があると思う。仏教思想を時代社会の関心の言葉で考え直してみたいのである。（本多弘之）

宗教的信念がはらむ一つの危険性

人間はあちらこちらに欠点があり、そして心も弱い、身体も有限ないのちであって、本当につたないいのちでしかない。にもかかわらず、宗教的信念をいただくことにおいて、ある意味でこれでいいのだ、これでこのいのちが十分いただけるのだ、というようになる。これが宗教的信念の特質でしょう。

しかし、宗教あるいは仏教というものを一人の人間がそのように信じたり受けとめたりするとき、本当は人間として生きるということは、共同体を生き、時代とともに念々にいのちを果たしながら、この有限ないのちを十全な意味として生きるという課題なのですが、それが何か個人レベルの満足の中に埋没し、完成してしまうという錯覚をもつ危険性があるのではないかと思うのです。

特に仏教の態度のうちには、お釈迦さま以来、この世の価値、美しさ、意味とかによって、かえって人間は苦しめられ引きずり回される。だからこの世の価値を超えたものに依って生きたいという要求があります。誰でもそういう要求にはどこかで触れているのだろうと思いますが、これは求道心、菩提心というものの一つの特質でしょう。

煩悩、欲とか怒りとか、この世の日常生活に関わって人間の心理が動かされる。そういうあり方を断ち切って、個体としての人間が、ある意味で十分な意味と静けさとを取り戻すような生き方をしたい。それを実現するために家を捨ててこの世の一切の意味をいったん断ち切るという出家の精神が、ある意味で仏教の本流、主流を貫いています。

出家教団というものは、人里離れたところに共同体をつくり、そこでいわゆる濁世（じょくせ）を、煩悩とともに

欲が絡み、恨(うら)みが絡み、そこで情熱も湧くけれども悲しみも与えられる。そういう濁世という場をあえて遠ざけて、時代とか社会とは切り離された空間で人間としての独立を回復するという試みをするのです。

親鸞聖人の願い

ところが、親鸞聖人という方は、そういう仏教の流れをある意味で批判して、それまで正統とされた仏教からは脱落する形で、より人間らしい共同体を生きる人間、あるいは実存共同体を生きる人間存在としての満足というものを求められた。その象徴的な言葉が「非僧非俗」という言葉です。つまり、出家共同体である僧（サンガ）ではなく、そして俗でもない、単に世俗的価値に埋没して生きるのでもないと。そうした「非僧非俗」という言葉のもとに親鸞の名のりをあげられたのです。

だから今、親鸞という名前で現在に立ち向かうということの意味は、特殊空間で、特殊体験のごとき宗教経験をもって人間を救うというあり方ではなくて、時代とともに、社会の苦悩とともに、つまり濁世の只中に生きながら、しかし、単に濁世の苦悩に引きずり込まれて埋没しているのではない、そういうあり方を探し、その根拠を見定めることであろうと思うのです。それが、親鸞という方の意味であり、願いであろうと私は信じております。

この親鸞聖人の願いに触れて、親鸞聖人の教えをいただいて生きる我らとしては、この4000万人の首都圏というものを見捨てて、静かなのがいい、古いのがいいといったように生きることはできないでしょう。東京は、生活空間としては、単に人間が静かに生きるということからすれば、こんなやっかいな場所はないでしょう。しかし、静かな生きやすい場所で宗教体験を持とうとする方向を取るなら、それは親鸞聖人が批判した傾向性ではないかと思うのです。

罪悪深重の濁世の中で、自分自身もその罪の共同体をいっしょに生きているその中で、どれだけ辛くとも、どれだけ汚れようとも、あるいはそれによって自己を失いそうな人生になるかも知れないけれども、そういう中に立って、しかし、失われない自己を回復するということ、悲しみ苦しみもがいているだけではない立場を回復するということが、親鸞という人がこの世に投げた大事な人間の生きざまではないかと思うのです。

困難至極ではあるけれども、あるいはつぶされてしまうかも知れないけれども、この首都圏で本当に現代と対面して親鸞聖人の使命を表現し、そしてそのことを本当に生きて伝えるような営みが継続されるべきだというおもいがあるのです。

一人ひとりの人生は一人ひとりの場所ですから、他人の場所に入るというわけにはいかない。それぞれの専門分野にはそれぞれの課題があると思うのです。けれども、そういうものが投げかけている時代の問題と無関係に宗教空間があるのではなく、その辛くて矛盾多き問題とともに歩むような原理、展望といったものを本当に切り開いていくことができるなら、親鸞聖人の願いというものは、決して単なる800年前に亡くなった方の個人的おもいではなく、時代とともに生き生きとした人間解放の原理として伝え得るのではないかと、そういうふうに私は深く信じているわけです。　（文責：センター）

「親鸞思想の解明」（有楽町の「東京国際フォーラム」で）

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

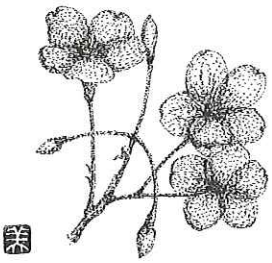
仏教の人間観をめぐって

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

連続講座「親鸞思想の解明」の第２回から第５回が、いずれも東京国際フォーラム（有楽町）で有識者の方々を招いて行われた。センター所長・本多弘之が、親鸞思想と現代社会の接点をさぐりつつ、第２回では仏教の人間観をめぐって、第３回では浄土とヴァーチャル・リアリティーをめぐって、第４回では超越の問題と近代科学をめぐって、第５回では再び超越をめぐって、それぞれ問題提起を行い、それを受けて有識者の方々との間に活発な意見交換がなされた。第２回の一部をここに紹介する。　（越部良一）

菩提心の復権

現代が混沌としているとか、方向が分からなくなっているということの一番の問題というのは、人間像がほとんど消え失せているというところにあるのではないかと思います。人間を根源的に鍛え上げていくこの苦悩の娑婆、この苦悩の人生というものの意味を、本当に見直すという智慧をもつことができないままに、経済価値のみが人間の価値であるといったような、戦後の歩みの中で皆さんもご承知のような、経済的人間像が人間だというふうになってしまった。



現代のどういう領域に関わっているにしても、一生懸命にやっていることの根源的意味に対する自信喪失というようなものがあるのではないか。人間存在自身に対する深い信頼というものが欠落したのではないか。自己自身の根源的な立脚地というものに対する深い、ことばでは表せない深い信頼というようなものが、特に戦後以降の、これから日本を担う人たちにどうも伝えられていない。こういう危機感を私は感ぜずにはおれないのです。仏になろうと歩む存在としての人間像の復権、菩提心の復権、そんなことばで言ってしまいますと、何かちょっと肩をいからすようなことになりますけれども、別のことばで言えば、愚かな煩悩具足の凡夫のままに歩んでいけるということ。そういうことを思うわけです。

時の中で時を切る

仏になろうとする意欲が菩提心です。菩提心の復権といった場合、これは自力の菩提心ではない。横超（おうちょう）の菩提心です。自力の菩提心は、自分で縦方向に超えようとする。「横超」とは、横ざまに切ってくる、横ざまに超えていくこと。ある意味で全然超える方向をもっておらず、平面にどんと座っているままである。愚かな凡夫たるわれらは、自分では縦方向に絶対に超えられない。自分で超越などまったくできない。にもかかわらずそこに如来からの、大悲からの根

源的な力のはたらきがこの身に感ぜられることで、愚かな凡夫たるままに、超えずして超えるというような、ある意味で超越性が自覚される。

「横超断四流」という善導大師のことばを親鸞聖人は大切に取り上げられた。四流というのは生老病死の四つ、あるいはこの人生の中で暴れ馬のごとき欲というのが四つ数えられていて、それを四流という。それを断つ、横ざまに切ると。われらは愚かな凡夫であり、煩悩のままに生きるしかない存在だけれども、十方衆生を救わんとする如来の呼びかけに信頼するという信念、本願の信念をいただくならば、その時に、即時に横超断四流であると、こういう随分思い切った宣言を親鸞聖人はしておられる。この現生の今の一念一念のこのひとときを、何よりも大切な、一番失ってはならない時として生きることができる原点を、親鸞聖人は「信の一念」とおっしゃった。流れていく時の中にあって、時が止まるような、時が切られるような、そういう時をもつことができるのが信の一念であると。信心がそこに、切断的な時をもつ。時の中にあって時を切るというような意味が、南無阿弥陀仏の一念に立つことにはある。南無阿弥陀仏の一念は生老病死を切ると。

流転のいのち、流され流され、転がされているような哀れないのちが凡夫のいのちである。凡夫というものは、頑張ろうとしても頑張れないし、たとえ頑張ってみてもくたびれ果てる。状況に流され、煩悩に流され、ある意味で自分というものがもてずに、流され転がされてしか生きられない哀れな存在である。こう言いながら、そういうふうに流されていく時間を断つような力を与えるものが本願の信念だと。本願の信念をいただくなら、凡夫のままに、一挙に仏になることができるような時をもち、生老病死の苦悩の人生を一挙に断つといってもいいような時をもつことができる。この現生の意味の転換、そういうことを、親鸞聖人は力を込めて語ってくださったのだと私は思っております。

本多弘之所長

決して死なない信念

現代は、ある意味で刹那主義と言いますか、多くの人はこの人生が終わったらみんな消えてなくなるくらいのつもりでこの人生を生きている。虚無的人生観、何か生きていながらこの生が終わったら全部終わりだというような人生観。どうするかという目的もないし、どうなるのが本当によいのかという価値観や意味づけも曖昧な、それこそ人間像が曖昧な人間観。そういう時代にあってなおかつ、それならばなおさらのこと、現代の時の意味と価値を本当の意味で回復するという課題を投げかけることができる思想が、親鸞という人にはある。

現在の一念一念に、本当の意味で人間存在を見直し、人間存在を深く信頼し直すことのできる視点というものをいただいて生きていける。たとえ何時われわれの人生が終わろうと、永劫に続く意味をもって、未来の不安の一切を現在の一念に断ち切って生きていける。そういうことであるなら、現在のような虚無主義的、刹那主義的な人生観のなかにあっても、その孤独と悲惨の考え方を破って、新たな刹那の絶対的な意味を開いていける。現代にあっても、決して死なない信念として親鸞が呼びかけていけば、きっと響いてくるものがあるのではないかと、そう私は信じているわけです。

（文責：センター）

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

闇を担って生きる

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、先にセンター通信でお伝えした第５回までに引き続き、第６回と第７回が東京国際フォーラム（有楽町）で有識者の方々を招いて行われた。第６回では大慈悲をめぐって、第７回では本願をめぐって、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者の方々と活発に意見交換がなされた。ここでは、先に行われた第５回の問題提起からその一部を紹介する。

（越部良一）

闇へ闇へ

曽我量深先生は若い頃、清沢満之先生の願いを受けて東京の真宗大学の教員を務めていたのですが、真宗大学が教団の保守勢力によってつぶされてしまい、越後の養子先のお寺に帰って、短い期間だけれど住職をされたそうです。門徒の家にお経をあげにまわったりといった生活の中で、「田舎寺の住職」という文章を書いています。

曽我先生はまだ若かったということもあるし、清沢先生の願いに触れたということもあり、それと何よりも、思想的能力の持ち主でありましたから思索が湧いてきてしまうのですね。とにかく湧いてくる想念を自分で表現せずにはおれない。ところが、ご承知の方も多いように、曽我先生の若い頃の思索を了解できたのは金子大栄先生だけだというほど、曽我先生の思索というのは、普通では何を言っているのか分からないのですね。そのくらい高度な思索をする素質を持っておられただけに、田舎に帰って、曽我先生と話し相手になるようなひとがいなかったのでしょう。それで非常につらい時をすごされた。孤独感と自分の考えが表現できない辛さとで悶々として……。そのことを曽我先生は何回も何回も手紙で金子先生に書き送っている。

「闇へ闇へ」と曽我先生はおっしゃっていますね。自分は寺に育ち、清沢先生の教えを受け、浄土真宗の救いが自分の救いだと信じて生きてきた。ところが本堂で阿弥陀如来を拝んでいても、阿弥陀如来の光が来なくなった。自分の精神生活が闇だと。いくら念仏を称えても、称えている自分のこころが闇だというその事実をじっと見つめて、闇のようなつらさの中で救われなかった。

そして苦しんでいる中で、闇の中で、もがきながら如来の救いということを考えている中に、法蔵菩薩を思い出したのです。一切衆生を救わずんば止（や）まずという、その願いが響いてきた。この闇こそ、法蔵菩薩がたすけようとする闇なのだと。阿弥陀如来の救いは自分に来なくなったけれども、法蔵菩薩がここにおられる。

法蔵菩薩というのは因位の菩薩です。「法蔵菩薩因位時」と『正信偈』にありますよね。つまり、これは因位の救いです。果の救いは光として来るけれど、因位の闇の中に、本当の闇の中にいっしょに歩もうと、苦悩を担って歩もうという大悲が来た。このことが実は光だったのだと。つまり外から来る光ではない。闇の中にこそ、本当に闇を生きようという光がある。法蔵願心は、明るみへではない。「闇へ闇へ」という、その闇へという願いにわれわれはたすかるのだ。闇を担って一切衆生をたすけようという願い。それを聞いたら、自分が闇に苦しむなどということはたいしたことではない。法蔵菩薩が立ち上がって来る。闇を担って生きるのだ。そういう直感を得られて立ち直られた。曽我先生の一生の仕事のうちで一番面白いのが、この法蔵菩薩ですね。

因に立ち続けるということ

親鸞聖人は、信心は浄土の正因だとおっしゃる。信心というのは因です。しかしどこかで人間は果が欲しい。つまり結果を持ちたい。仏教でいえば涅槃が欲しい、菩提が欲しい、自分はさとりを得たのだと言いたい。ところが親鸞聖人は、どこまでも自分を愚かな、苦悩する人間として、罪深い人間として生き切った。本当に愚かで罪深い身であるという自覚と一つに、自分の中に如来の大悲をいただいたという確信をもち、それを「信心」という名で押さえるわけです。こういう考え方、つまり因のままに立ち続けるという発想は、われわれの普通の考え方にはないのではないかと思います。だからわれわれには考え難い。因を得たら果を得たいというのが、日常経験の延長上にあるわれわれの要求ですから。たねをまくのは何のためかといったら、芽が出て花が咲いて実がなって、それが取れるというのがわれわれの歓びですから。たねだけでいいというのはありませんね。あなた方勉強しなさい、そうしたら立派な人間になれ

ますよと。つまり果を約束して、果になると。結局、もっとましな人間、より人間らしい人間というような発想の超越の方向です。

果の救いが欲しい、明るみが欲しい、光が欲しいと言う。けれども本当は、そういうものでは苦悩のいのちはたすからない。光でたすかるとか、そういうのはないわけではないけれど、それは醒めてしまう。酔いが醒めるように醒めてしまう。むしろ苦悩の実存、逃げることのできない罪悪のいのち、そこで、それをそのまま引き受けて歩むような大悲心というものに触れれば、それが救いなのだ。どうにも救い難い人間であってこそ、本当に救われる道がそこにあるのだということが証示できる。

現代というこの時代は、本当にどのこと一つをとっても解決の道がない。とにかく何であれ手立てがなくなりつつあるわけでしょう。そういう時に、どうにかしたらどうにかなるというふうに考えるのが、近代理性だろうと思うのです。しかし、どうにかできるという発想で何とかしていくということは、もう行き詰まっているのではないかと思うのです。本当はどうにもならないのだと。どうにもならないということに立ってどうするのだという発想ができるとすれば、親鸞しかないのではないか。これは私の思いなのですが、あきらめるわけではなく、あきらめるというよりも、どうにもならないというところまで見抜いた上で、発想を転換して立ち上がらなければいけないのではないかということを、いろいろな問題について思うわけなのです。

（文責：センター）

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

人間を破る言葉

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第8回と第9回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第8回では近代文明の罪業性をめぐって、第9回では現代の非宗教化と浄土の光をめぐって、それぞれセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者の方々との活発な意見交換がなされた。ここでは、先に行われた第6回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

人間を破る言葉

仏教が教えようとする真理性、存在の本来性というものは、我々の妄念からは見えない。妄念からは見えないが、教えをとおして何かそこに「ある」ということが感じられる。その「ある」と感じられる世界から呼びかけてくるはたらき、そういう形で「本願」というものが教えられている。「願」が呼びかける。「願」が人間にはたらくと。

人間は、相対的な存在のありように悪戦苦闘し、それ故に苦悩を生み、上を見たり下を見たり比較の煩悩に苦しめられ、それぞれの存在がそれぞれに与えられている本当の尊さに気づけない。まさに欲求不満と言いますか、何か満ち足りないままに、「やむを得ないが、こんなところか」という形でしか満足が見出せない人生になっている。そういう人間のあり方に対して、根源から「本来に目覚(めざ)めよ」という呼びかけとして「願」が教えられている。本来、我々にあるのかも知れないが、我々からは絶対に見えない、絶対に体験できないものから呼びかけられる。そうした仏の願いというものは、本来、形にならない。「願」というものには、形はない。

我々の願いは、成就したら消える。けれども成就した「願」が本当に力を持つ、これが「如来の願」だと。だから、いわゆる人間の言う願いではない。人間の言葉になっている願は、人間の欲望をあらわすかも知れないが、「如来の願」は欲望ではない。人間は外へ外へと自分の欲望を満たそうとするけれども、人間自身が開かれるということはない。人間の願という言葉、人間の願いの方向というものと、仏教が「願」の言葉で教えようとする人間への呼びかけとは、方向が違うわけです。

人間が人間から発想して対象を見、対象に呼びかけていく表現、そうした表現とは逆に、仏教の言葉は、いつもどこかで人間を目覚めさせようと呼びかけてくる。本来、形がない、本来、言葉ではないものをもって、人間に呼びかける。言葉を使わざるを得ないのだけれど、人間の状況を言いあてる言葉ではなくて、人間を破る言葉。一切の言葉は、人間の対象としてあるわけですが、仏教の言葉は、対象の実体化を破るというはたらきを言葉に与えようとするのです。

だから、浄土というものが実体的にあって、そこに行ったらたすかるという話ではなくて、浄土として呼びかける「願」のはたらきがあって、そうした「願」のはたらきに触れれば、言うなれば、それがもう浄土だと言ってもよいわけです。しかし、浄土と言ってしまうと、浄土がどこかにある特定空間という意味を持ってしまうから、そうは言わない。そのような浄土と

いう場所があるわけではないのだから。言わないけれど、浄土という場所を教えて呼びかけるわけだから、呼びかけてくるものに触れれば、そこは浄土だと言ってもいいのです。そこが言葉というものの難しさですね。

大慈大悲と人間の分限

浄土の本質、浄土を生み出す本性というものは大慈悲です。何のために浄土が教えられるのかというと、大慈悲のためだと。人間の慈悲というものは、時にもよおし、時にもよおさない。あるいは『歎異抄』に言うように、もよおしても、すえとおらない。けれども、それで要(い)らないというわけではない。人間は、それを大切にして生きていくしかないわけだけれども、悲しいかな、それだけでは人間は成就しない。そこに大慈悲があるからこそ、人間は人間の分限が見える。大慈悲が教えられなければ、人間は小慈小悲でもって自己を正当化する。小慈小悲というものは、すえとおらないし、むしろ罪を起こすこともある。自他ともにそれで迷惑していくということもある。たすけられることも勿論あるでしょう。だけど、人間の分限が大悲の前に照らされるということがあって、人間は本当に謙虚になれ、愚かさを知らされるのです。

人間が、自らを正当化していく危険性を破って本来に帰っていくという方向性を、仏教はいつも呼びかける。自分ということになったら、和讃にあるように、「小慈(しょうじ)小悲もなき身にて有情利益(うじょうりやく)はおもうまじ」(「正像末和讃」) と。

では、現実に親鸞が人をたすけたいと思わなかったのかというと、そういう意味ではないでしょう。そういう意味ではなく、慈悲心というもので本当に生きているかといえば、恥ずかしいけれども、そういうものではない。自我心の方が強いと。衆生をたすけるはたらきは、如来のはたらきだと。本願のはたらきだと。だから自分が救ってやるという話ではない。如来の大慈大悲のみが衆生を救う。如来の大慈悲が自分に響いて、如来を信ぜよということが自分の中に、「そのとおりだ」と頷ける。だから大慈悲心というのは、自分が大慈悲を生み出す心だという意味ではない。自分の心が能動的に大慈悲だというのではないのです。

それは、ある意味の絶対受動です。能動というよりは受動である。それが他力という言葉の誤解される原因にもなるわけです。受動だからお与えだろうと。そうだとすると、何もしなくてよく、怠惰を正当化するというだけの話になる。しかしそういう意味ではない。いのちをどういうふうに尽くしていくかというのは、一人ひとりの宿業だろうと思います。縁が与えられる中で、動く心の中で、人は因縁の事実を精一杯生きていくわけですから。だから、何もしないでよいのが他力だとか、そういう誤解をはらわなければならないと思うのです。現在に安住するから、それで終わりなのではない。未来に向かって奮励努力できるのが精神主義だと清沢満之先生はおっしゃる。与えられた因縁のところに全力を尽くして生きていけるのだと。

本当に、一つ間違えば死というものに踏み込んでしまうようないのちだけれども、与えられているいのちのあいだに、この苦悩のいのちを背負って歩めるということ、それが現代という時代の、この闇の時代に大事な一点になるのではないかと思うのです。　（文責：センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

センターでは、皆さまのご要望に応え、本講座を公開で開催することにいたしました。どなたでも聴講（無料）いただけます。問い合わせは、センター（TEL 03-3814-4900）まで。

記

日時：2002年12月25日午後6時30分～9時
2003年　1月28日　　同　上
　　2月27日　　同　上

場所：有楽町・東京国際フォーラムG410（予定）
JR・地下鉄「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

非宗教化する現代と浄土の光

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第10回と第11回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第10回では人間の本当の場所と柔軟さについて、第11回では「楽」の問題について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第９回の問題提起からその一部を紹介する。

（越部良一）

現代の非宗教化

私の師匠であった安田理深先生の奥様は、百三歳でお亡くなりになるまで意識が透明で、非常に厳しい言葉で、「若い人は聞法しなさい。人生の目的は何ですか」ということを言い続けて亡くなって行かれた。

その奥様がよく言われていたのは、老人ホームに週一回連れて行かれると、皆、寝ているか、車椅子かだと。人の世話にならずに生きるということは、もうほとんど九十歳を過ぎたら難しい。よほど達者な人は、たまにはいるけれども、ほとんどの方は自分で自分のことができなくなっている。だから、自分のことを自分でして、元気に歩いている奥様を見ると、皆、「どうしたら、そうやって長生きできるのですか？」と質問する。それで奥様は、「何のために長生きするのですか？」と切り返す。そうすると「何のためでもない。ただ生きたい。そういう人生しか、今はない」と言う。そのことの空虚感とか無意味感に悩む力すら失って、ただ、生きているというのが今の老人だ、という厳しい批判をしておられました。つまり精神生活がない。ただ豊かに、ただ経済生活とか、文明生活とかを楽しくおかしく生きられればいいという価値観のもとで生きて、長生きしてしまった。その結果、何もないと。ただ生きているということだけで精いっぱいで、そこに内容は何にもない。そういうことを見て奥様は嘆いておられました。これが日本の精神生活の現状だ、ということをぶつけていかれたわけですね。そういうことが、現代が非宗教化しているということを実感として感じる形なのだろうと思います。

煩悩の垢

「無垢光炎熾　明浄曜世間」と浄土について天親菩薩は『浄土論』で語っています。「無垢」というのは、煩悩の垢がないという意味です。三垢という言い方をして、貪、瞋、癡というのは三つの垢だという言い方をします。垢は人間の排泄物ですから、人間から出てくるものです。だから、ほこりが外からくっつくというのではなくて、生きているということが生み出してくる汚れです。つまり、煩悩と自分との関係は、自分の外側に煩悩がくっついてくるから取り除いたらきれいになる、そういうのではない。

「煩悩具足」ということは、煩悩を手放すこともできるというのではない。だから、「罪悪深重」と言うのです。都合のいいことは欲しい、というのが欲です。怒り、瞋というのは、自分にとって都合の悪いことを避けたいという意思ですから、貪・瞋は裏・表です。都合のいいことは欲し、都合の悪いことはできるだけ避けようとする、そういう形でしか人間はものを発想

しませんから、貪・瞋というのは外にくっついているのではなくて、人間自身の意思を動かしているひとつのエネルギーであると言ってもよい。貪欲、瞋恚で動いている。しかしそのことを自覚せず、無智である。そういう構造で、言うならば人間のいのちは垢を生み出す。垢は洗い落とせば一応きれいになるように見えるけれど、三日も経てば溜まってくる。中から出てくる、汗みたいなものですから。垢が出なくなったということは、死んだということです。生きていれば垢が出るのと同じように、生きていれば煩悩と共に生きる。それに対して浄土は垢がない。垢がないという言い方で、人間の単なる世俗空間ではない空間のことを言っているわけです。そこから光が来ると。「無垢の光炎」と言われる。

浄土の光炎

炎は、煩悩の怒りの象徴にもなります。善導大師は「二河譬」で煩悩の欲と怒りとを、水の河、火の河に喩えています。その火、人間を焼き尽くすような炎というものが、実は、ある意味で菩提心の象徴にもなる。『十地経』（『華厳経』「十地品」）という経典では、菩薩の十地の歩みの一番初めの地は「歓喜地」と言い、その次は「離垢地」、垢を離れるというふうに言うのです。第三は「発光地」、第四は「焔慧地」と言いまして、第四に来ると焔が出てくる。つまり、菩提心が磨かれてくると初めは歓び、その次には煩悩の垢を破ってくる。そこから智慧がわいてくる。智慧が磨かれてくると焔になってくると。菩提心が輝いてくるといいますか、そういうことを象徴的に語っているわけです。だから、炎と言うと悪い喩えばかりではなく、非常に積極的な、大きな菩提心の動きをあらわす場合もある。

『浄土論』の、ここでの場合は「浄土の光炎」です。燃えさかるような炎として、浄土がわれわれにはたらきかけていると。そして「明浄」、明らかに清くして世間を曜かす。「曜」は強い輝きをもったはたらきのことで、「世間」とはわれわれの生きている場所です。浄土というのは光り輝いて何をするかと言えば、世間を明るくするのだと。世間を明るくし、清くするというはたらきが浄土の相であると。こういうふうに天親菩薩は語っている。こういう浄土の相に親鸞聖人は触れられて、精神生活を明るくするはたらきとして非常に歓ばれたのだろうと思うのです。歓ばれるということは、逆にそこから離れた時の自分というものは、煩悩の垢であり、精神の闇であり、憂鬱さであり、あるいは無意味さであり、寂しさであり、悲しさであると。

孤独と無意味と空虚と、こういう感情、一個のいのちの感覚というものは、親鸞聖人の時代であろうと現代であろうと同じわけです。それが起こる場面や状況はそれぞれ違うかも知れませんけれども、そういう言葉で言い当てられる人間の感情は普遍性を持って響いてくる。人間として生きれば、必ずどこかに苦しみや悩みといわれるものを背負って生きている。そうした重層的な精神の闇を、ひとつ剝がし、ふたつ剝がししながら浄土がはたらいてくる。そういうはたらきが浄土なのだと。時間、空間を越えて繰り返し光がはたらいて、われわれの精神を本当の意味で解放し、明るくする。逆に言えば、われわれの闇は、このはたらきから離れればどこまでも深い闇の中に沈んで、光が見えない。こういうことをつくづく感じるわけです。

（文責：センター）

※本講座の第１回から４回までの詳細は、センター発行『現代と親鸞』第２号に所収しています。お申し込みはセンターまで。

「親鸞思想の解明」のご案内

センターでは、本講座を公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2003年3月25日午後6時30分～9時
5月　9日　　同　上
※４月は休講します。

場所：有楽町・東京国際フォーラムG405(3月) G605(5月)
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩１分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

本当の柔らかさを与えるもの

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第12回から第14回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第12回では浄土の水について、第13回では浄土の大地について、第14回では浄土の音について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者・一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第10回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

言葉の山

人間は言葉の歴史をもち、貴重な言葉の蓄積があります。その言葉の山に、本当に生きた根源的な開（ひら）けが欲しいと思って飛び込んでいっても、下手をすると、迷路に入ってしまって戻る道がないというふうになりがちです。財宝の中に埋もれて、息がつけなくなる。

特に、学問というのは「象牙の塔」という言葉もあるように、突っ込んでいけばいくほど出口がなくなる。「ミイラ取りがミイラになる」という譬えがありますが、本当は、一番最先端に行けばもとへ出ねばならないのです。曽我量深先生は、「深い山に入って、一番深いところに行ったと思ったら里に出るものだ」と言っておられました。山は、いずれまた里へ出ると。だから本当は、突っ込んで一番最先端のところに行った時には、現実の問題に一番近いところに行っているはずなのです。

ところが、言葉の山というのはそうなるとは限らない。言葉の山に飛び込むということの根本には、何か求めているものがあり、本当は、その求める源泉に辿り着くか、もしくは戻って来なければいけないのですが、戻って来れなくなるということがあるのです。

私が尋ね入った親鸞聖人の言葉の山も、場合によっては、汗牛充棟（かんぎゅうじゅうとう）して無味乾燥な言葉の山ともなりかねない。ですから、生きた現代の課題と触れながら言葉というものを洗わないと、言葉を洗うということは、古い言葉が新しい言葉と擦（す）れ合って、古い言葉が換骨奪胎すると言いますか、そういうことなしに、古い言葉が古い言葉として伝えているひとつの意味空間の中にただ埋没してしまうと、現実の問題と全く無関係な虚偽の空間になりかねないのです。そうなると、現実の人間、生きている苦悩の実存と触れることができなくなる。これは、私どもの大変陥りやすい病です。

幸いにして私は、念々に、切れば血が出るような思索をしておられる先生に出遇（あ）うことができ、長い間、その先生から教えをいただいてまいりましたから、ミイラの山から出ることができたと言いますか、言葉の山に突っ込んでいくことはなかったわけですが、しかしまだ、何時（いつ）突っ込んでいくかもわかりません。

そういう意味で、「そんなところで眠っている暇などないぞ」という課題が、生きているこの大地を揺るがしているような気がしています。ただ単に、現実の困難な課題に突っ込んでいくのではなく、古い言葉が語る、言葉の深い深い源泉というものを依（よ）り処（ところ）にしながら、古い言葉が語ろうとする根源的な開けの世界を、現代の困難な思想状況の中に開いていきたいと、私はそんなふうに自分の願いを位置づけています。

柔らかな心

『浄土論』の展開の中で、「触功徳」という言葉で教えられている問題があります。そこでは、浄土の「草」ということを、「宝性功徳の草、柔軟にして左右に旋れり、触るるもの勝楽を生ずること、迦旃隣陀に過ぎたり」と言っています。浄土の草は、とても柔らかくて、「迦旃隣陀」という、この世のきわめて柔らかい草よりも、もっと柔らかい。そういう語り方です。これもひとつのイメージ、象徴ですから、文字どおり、浄土に柔らかい草が生えている、そんなことを言っているわけではありません。本願の超越性に触れるということは、人間に本当の柔らかさを与えるのだという、そういうことの象徴でしょう。本当の柔らかさとは何かというと、「柔軟心」ということが言われています。柔軟心とは、不二の心です。

われわれは、常にふたつの心です。自分がいて他人がいる。自分がいて物がある。つまり、自他が割れ、自分というものが、常に他を外に見て一体感を失っている。男と女も違うし、動物と人間も違うと言う。では、みんな違うけれどもひとつだということを、一体、どこで感じることができるのかということです。

ここでは、ただ生きている現象でみんな同じだと言うのではなく、浄土という大地においてひとつだと言うのです。つまり、みんな違うのだけれど、みんな違いながら違っていることの根源に平等性を感じると。人種が違おうと、生きている国が違おうと、あるいはイデオロギーや価値観が違おうと、根源的には平等だという眼をもつのが仏教徒の姿勢でしょう。

人間は、しょせん頑固です。一人ひとり違う生命を自分で生きているのですから、どうしても相手（他の人）にはなれない。どんなに親しい友であっても、ひとつにはなれない。実は、「違いながらでいいのだ」という関係でなければ、本当は親しい友と一緒にはおれないはずです。同じになろうとしたら必ず喧嘩になる。「お前とは違う。違うけど仲がいい」。そういうことはあり得る。そういう意味で、柔軟心ということは、非常に大事ではないかと思うのです。

「親鸞思想の解明」（有楽町の「東京国際フォーラム」で）

仏陀は、教えるときに「相手と同じ心になれ」と教えられた。では、同じ心になれと教えられてなれるかというと、人間はなれません。けれども、なれないということにおいて自分を自覚する。そして、より大きな、もっと広大な大悲というものが仰がれてくることにおいて、違うままに許される。そこに、何か柔らかさというものが与えられる。そういう世界を開いてくる。こういう意味の象徴が、浄土なのです。

今の人たちは、みんな自分の場所を作ろうと争っている。自分の場所、自分の場所と言ってぶつかり合っている。だから、孤独になるのです。近代文明の果ては、みんな孤独老人しかないわけでしょう。それを本当に破るものは何か。難しい問題ですけれど、浄土という問題が、こういう形で私たちに教えられているのです。

（文責：センター）

※本講座（第 5 回～ 8 回）の詳細は、『現代と親鸞』第 3 号に掲載しています。お申し込みはセンターまで。

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2003年6月13日㈮午後6時30分～9時
　　7月24日㈭　　同　上
　　8月21日㈭　　同　上

場所：有楽町・東京国際フォーラムG405
　　JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩 1 分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

浄土こそ一人ひとりを目覚ます大地

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第15回から第17回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第15回では浄土の雨について、第16回では浄土の光について、第17回では浄土の声について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第13回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

浄土の大地

親鸞聖人は、「大地」という言葉を、比喩的に本願のはたらきとして語られる。われわれは、自分で自分の地面に立ち上がろうとするけれど、清沢満之先生は、われわれが立っている地面は、あたかも浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするものの如しとおっしゃった。まあ孫悟空ならできますけれど、われわれは、浮き雲の上であればすとんと堕ちてしまう。これは不安定さを象徴しているのです。今の状況が落っこちていってしまうという不安感です。本当に立てる大地がわれわれにはない。自我を立場にして大丈夫だと思いたいけれども、この自我なるものは苦に責められるし、大体、自我自身が思うままにはならないのです。

この世の中は、わが思いのままになるものは一つもないといってもよい。そういう苦悩の身は、実は大地を持っていないからだという。本来の大地があるのに、逆立ちしていて見えないわけです。そういうふうに教えて、私たちに目覚めよと呼びかける。われわれは逆立ちした地面に生きている。それを翻せば、そこは浄土を感じる場所になる。浄土の大地とは、われわれの真の大地なのだということなのです。

死んでからの救いへの疑念

浄土をどういう形で人間が知ることができるかというときに、浄土が単に向こうにあって、ここと違うところなら、向こうに行かなければわからない。だから、浄土教の教え方を文字通りに理解しようとした伝統では、人間がここで生きている限り、己が罪を抱え、凡夫として逆立ちして生きていますから、どうしてもたすからない。たすからないから、死んで彼の土へ往けると理解しようとした。彼の土は、きれいな美しい世界、素晴らしい世界ですよと。そうすると、死んだら往けるのだという儚い望みを未来に託して、今に賭けていくしかない。だから、念仏したらたすかるよ、浄土へ往けるよ、でも本当かな、と思いながらも念仏を称え続ける。そういうのが浄土教の信仰の形であった。早く死んだら浄土へ往けるだろうというので、念仏しながら西へ西へと歩いて行って、海の中に入って浄土に往ったなどという伝説がたくさん生まれてくるわけです。

そういう信仰のありかたに対して、親鸞という人は、深い疑念を持たれたのだろうと思うのです。つまり、人間が自分でたすかりたいと思ってたずねていくが、どれだけたずねても救いがない。だからといって、死んでたすかるという保証はどこにあるのか。そういう不安感ですね。死んだらたすかると素朴に信じられるのであれば、親鸞という人はあのような面倒なお

仕事はされなかったでしょう。『教行信証』は、読んでも読んでもよくわからないような深い問題をはらんだ書物です。では、なぜこのようなお仕事をされたのか。そこには、現在の罪の身と未来の救いの身とが、どうして一つに成りうるのかという思想的な課題がある。そして、仏教の教えをとことん学んできた身として、仏陀の救いというものに出遇うならば、それは今ここにあるはずだと。死ななければ救いに触れられない、というようなことを仏陀が教えるはずがないと。そういうたずね方が根源にあったのでしょう。

現生不退

親鸞の思想の一番の核にあるのが、「現生不退」という言葉です。今、この人生を生きながら、もう退かない、もう転ばないという確信です。如来の回向、一如からのはたらきというものをいただけば、現生に、ここに救いがくるのだと。しかし、煩悩を起こさないという身になって、そうなるのではない。毎日、腹を立てたり欲を出したり、失敗したり悩んだりしながら、その生活の全体を支えているはたらきを信ずるのです。人間は、ふつう苦悩が無くなったのが救いだと考えるけれども、そうであるなら死ぬしかない。苦悩があってよい。そのまま、まかせなさいという呼びかけです。そういう如来のはたらきを感じ取れば、苦悩があることが縁となって、この人生が歓びに転ずる。不退転をいただけば、それが人間として生きる起点となり、それがそのまま救いなのです。

「南無阿弥陀仏」には自分の力はいらない。お前が自分で本来にもどれるはずはないのだと。お前はもう万歳すれば、そのまま本来に、もとにもどしてくれるのだと。比喩的に言えば、鉄棒につかまって、もがきながら逆さまになっているようなもので、力をぬけばひとりでに大地にもどるのです。われわれはどんなことをやっていても、この人生は自分で何とかするしかない。けれども、そういう生活の一点に、根源的にまかせるしかないのだという智慧を持つか持たないか。そういう根源的なものとして、おまかせするという智慧が開かれると、楽になるわけです。不退転がこの世で与えられる。それが、親鸞という人の教えの持っているありがたさだと思うのです。

「絶対他力」と言うけれど、自分自身が完全にひっくりかえされるのが絶対他力です。自分が、もうどうにもならない愚かな身であるということが本当に見えた時、その見えるはたらきを教えてくれるのが他力なのです。だから、たすからない身だという懺悔と、たすけずんば止まん、という本願の語りかけとはぶつかるわけです。それが南無阿弥陀仏という事実です。これは、一般論ではない。主体的事実です。一切衆生の大地となろうという本願を、私ひとりのためであったと引き受けたのが親鸞です。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』）と。

現代の状況を見れば、もう絶望的なところがあるけれど、そういう状況だからといって、一人ひとりのいのちがどういふうに人生を感じて生きるのかという、その起点の問題は蔑ろにはできない。ひとりでは何もできないかもしれないけれど、やはり一人ひとりが一番大事なのです。一人ひとりが、一人ひとりの世界を大切にしながら目覚める方向に歩んでいきたいと、こう念ずるわけです。（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、10月17日は、國府田隆夫氏（物理学者・東京大学名誉教授）、下田正弘氏（仏教学者・東京大学大学院助教授）をお招きし、「科学技術文明と現代の不安」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2003年 9月17日㈬午後6時30分～9時
10月17日㈮午後5時30分～9時
11月14日㈮午後6時30分～9時

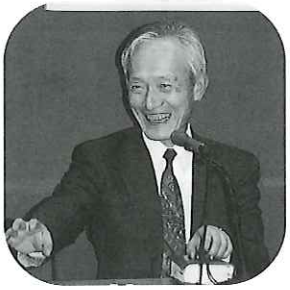
場所：有楽町・東京国際フォーラムGブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

妄念を破る浄土の鈴の響き

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之


本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第18回と第19回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第18回では仏教の言葉と浄土の声について、第19回では人間の分別と阿弥陀の正覚について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第14回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

浄土の鈴の音

『浄土論』の中に「虚空功徳」と呼ばれる功徳があります。その中で「種種の鈴、響を発して、妙法の音を宣べ吐かん」とうたわれています。そこでは何を語っているのかというと、無数の鈴が響きを発して、そして妙法の音を宣べると言うのです。「妙法」というのは真実の法です。すなわち、鈴の響きが、そのまま教えの意味を語りかけ、虚空、空間に満ちあふれるいろいろな音が、そのまま真理を語りかけるような意味をもつという、そういう荘厳です。

この音というのも、やはり象徴ですね。人間の感覚の対象としてあるものではない。何かそういう見えざる世界が、実は鈴の音のように鳴っているのだ、とわれわれに呼びかけてくる。では、何が鳴っているのかと言えば、人間の妄念を破った無我の仏法を呼びかける音を出しているのだと。われわれは、この世を生きていながら、この生活空間の意味を見出せずに生きている。人間の意識や生活、そしていのちを支えている無数のはたらきを見失ったまま生きている。まさに空虚に生き、空しく過ごしているのだと。そうした人間存在に、「真実に目覚めよ」と呼びかけ続けているのです。

自分が聞くことのできなかった世界

われわれの生活は、自分に都合のいいことだけが起こってほしい、都合の悪いことは起こってほしくないと思って生きています。しかし、仏法の真理性の音に触れると、人間にとって都合の悪いことや困ること、また、つらいことが必ずしも人間存在にとって忌避すべきものではなく、あらゆることが、仏法に目覚めよというはたらきを持ってくると言うのです。それは、人間関心において人間が善いと思う、いわゆるヒューマニズム的な正義感とか、進歩主義という発想ではない地平です。人間は、人間が考えたことは善いことだ、人間が考えたことは正しいことだと、その方向だけに進もうとします。だから、人間存在が本当に置かれているいのちそのものの響きというものが、ある意味で聞こえなくなる。実際、人間は他人のことにはよく気がつくが、自分のことには気がつかない。「あの人は視野が狭い」「あの人は心が狭い」と、人のことはよく見えるが、自分のことはわからない。

ところが本当は、自分がそういう狭い空間を生きて、狭い発想でしか生きていないのだということを、仏法は一人ひとりに呼びかけるのです。だから、親鸞聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』）と頷かれたということは、自分のために仏法のことばが呼びかけてく

れていたのだと解ったということです。これに触れると、自分が聞くことのできなかった、自分の本当の歓びの世界が聞こえてくるのです。「一切衆生を救いたい」という願いが、われわれの妄念を破る響きとなって、われわれに呼びかけてくる。その響きのもとは、形なき形である如来の願いであったのだと。

人間が人間をたすけたいという関心は、確かに、ある程度はうまくいくにしても、成就はしない。たすけるために、物を施しても、もらう方はさもしくなるし、あげる方は傲慢になる。人間関係というものは、どうしてもそういう我と我がぶつかった中でのやりとりになる。特に、経済観念で生きている現代生活は、そのやりとりで「得した、損した」ということになってしまう。情けないけれども、そうでないものが聞こえない。それほどまでに鈍感になっているわけです。現代人は敏感になっていると言うけれども、それは嘘でしょう。一部だけ敏感になっているに過ぎないのです。それも不健康な方向にね。だから人間というものは、お互いに哀れな存在であるなあと気づくということが、この鈴の響きなのです。

南無阿弥陀仏の鈴の音

この鈴は、いつでも自由に風が起こって、そしていろいろな音として鳴っている。その音は、南無阿弥陀仏なのです、本当は。南無阿弥陀仏の鈴なのです。南無阿弥陀仏ひとつということが私たちの生活の中に入ると、いろいろなこととの出会いに、いつでも南無阿弥陀仏が違った音をたてる。歓びがあり、悲しみがあり、あの事件が起こり、この事件が起こる。それといっしょになりながら、すべて仏法の音になって聞こえてくる。そういう生活が与えられてくることを、「浄土の生活」と言うのでしょう。

そういう世界を知らないと、われわれは文字どおりの実体的な感覚で、ぶつかった事件をぶつかった事件としてだけしか、その意味を感得できない。ぶつかった事件の意味を転じて、自分を育てる意味として、自分の生きている空間を支える意味としていただき直すということは、自分が努力して考えてわかるというよりも、南無阿弥陀仏として、響いてくる音が聞こえてくることなのです。それが、ここで象徴されていることではないかと思うのです。

浄土の鈴は、死んでから聞く音ではない。念仏のところに聞こえてくる声なのです。こうした超越性の声は、われわれがその声を聞ける耳の育つまで待っているわけです。では、そういう耳をどうしたら育てられるのかと言っても、その方法はないのですね。われわれに呼びかけてくる本願の呼びかけが、少しずつ少しずつ身に浸みていって、段々に聞こえてくる。南無阿弥陀仏ひとつに、浄土の鈴が聞こえてくるわけです。「ああ、また鳴っているな」と。鳴っているということは、こちらの愚かさが破られるわけです。「ああ、また腹を立てていたな、また欲を起こしていたな、また間違った考えでいたな」と、そういうことに気づかされる。くやしいけれど、残念ではあるけれど、自分の愚かさが見えてくる。自分の愚かさが知らされるということは、他人から言われると腹が立ちますが、浄土の鈴が聞こえたときはありがたいものです。他人から言われたら、「何だ」と思うでしょう。だけども、浄土の鈴が聞こえると、「ああ、そうだったなあ」と聞くことができる。それが、浄土の鈴の声というものなのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2003年12月12日㈮午後6時30分～9時
2004年　1月23日㈮　　同　上
　　2月23日㈪　　同　上
場所：有楽町・東京国際フォーラムGブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

心の闇にはたらきつづける浄土

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第20回から第22回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第20回では曇鸞の『浄土論註』の初めに述べられている、求道における五つの困難について、第22回では天親菩薩の『浄土論』の眷属功徳について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた（なお、第21回のシンポジウムについては、12頁を参照ください）。ここでは、先に行われた第16回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

人間存在の闇

人間が普通に生きている意識というものを、仏陀は、迷いの情、妄情というふうに言うわけですが、われわれは迷っているとは思わない。正しく考え、正しく認識していると思って生きているけれど、そのあり方全体の根に本当のことを知らないという盲点がある。それを「無明（むみょう）」、明るみが無いと言います。

私たちは理性をもっていて知恵があり、合理的にものを処理して賢いから人間存在は万物の霊長である、などと言って、あらゆる存在のなかで一番大した存在だと、こう思い込まされていますけれど、仏陀からすれば、人間存在ほど哀れな存在はない。つまり、与えられた存在自身に、人間以外の存在は、皆、自足している。生きていること自身を疑問に思ったり、生きていることに不平不満を抱いて苦しんだりということは、人間のみである。状況に痛んだり、苦しんだりすることは生命体には皆あることでしょうが、なぜ自分が苦しむのかと、苦しい状態を疑問にして、もう一回自分を痛めつけるというのは人間だけですね。だから、人間ほど哀れな存在はない。

どんなに賢く生きていると思う人間であっても、自分の存在に対する深い不満足、こんな人生ではないはずなのだがとか、何でこんなになってしまったのだろうとか、何か訳のわからないものを抱えている。それを「愚痴（ぐち）」と言う。無明という意味での愚痴。つまり、根本的愚かさですね。世間的にはどれだけ賢くとも、人間は根元的に愚かであって、そこから脱出できない。そういう意味の「痴」です。世間で成功するか、しないかという問題ではない。仏教から見た人間の愚かさです。

状況に流されて自分を取り戻せない。私たちは、自分では自覚していなくとも、その底に、そうした闇が本当は晴れたらいいと、どれだけ願っているかわかりません。闇から脱出したいという深い願いがある。闇だと言われたら闇だなと思い、流転だと言われたらそうだなと思うわけです。だから、そういう闇を破りたい、という如来の願いが人間に響くということは、人間それぞれの根源に、どこかで本当はこの闇が破られなければならないという課題を背負っているということなのでしょう。

浄土の光

宗教というものには、光という概念がつきものですが、それは、何か宗教の語りかける言葉に、人間の心を根本から明るくするはたらきがあるからでしょう。人間はそういう言葉に触れ

ないと暗い。つまり、何かそこに精神的な落ち込みであるとか、閉鎖性だとか、自己嫌悪だとか、何かそういう自分で自分をつらく感じるところがある。

そういう心の闇をもつ人間を、本当に平等に光に摂め取りたいという願いをかたちにしたものが浄土である。それで浄土が「光明功徳」、光として説かれるのです。それは、衆生の闇を晴らしたい、十方の闇の世界をすべて明るくしたいという仏の願いがかたちをとったものですから、浄土はどこかにあるというよりも、闇のあるところに浄土があるのです。すなわち、自覚すれば、闇のあるところには光がはたらいているのです。

この光としての浄土を親鸞聖人は、「真仏土」と仰せられる。真の仏土、真の仏である阿弥陀如来は、無量光、無辺光、無碍光と、光の名で言われます。不可思議光という言い方もします。人間の考えを超えていて、考えてわかる光ではない。けれども、出遇ってみると本当にかたじけない光である。心の闇をどこまでも晴らし続けてくださる。闇が深ければ深いだけ、光の明るさが明るい。だからわれわれの闇の深さは、自分でわかる以上に深い。それだけ阿弥陀の光の深さが深い。そこに歓びが尽きることがないという味わいが、親鸞聖人の「愚禿悲歎述懐和讃」のなかには感じられます。悲しいけれどもかたじけないと。こういうのが、浄土の光がわれわれに呼びかけてくる意味だろうと思うのです。

あきらめない心

私は、こうやって、いただいた仏法を何とか少しでもわかるように話そうなどと、分別してやっておりますけれども、本当はどう逆立ちしてみても、なかなかわかる話ではないのですね。でも、わからなくても、何か自分の根源にささやいて来て、どこかそうかなというものがあればよい。つまり、針の穴のようなものでよいのです。土手に針の穴さえあけば、あとは放っておいても水が流れる。その針の穴が難しい。なかなか頑固な岸壁でね。けれど、あきらめることはない。法蔵願心はあきらめることがない。われわれの闇は晴れることがない。だからこそ、晴らさずんば止まんと、永劫に修行すると法蔵菩薩は誓っているわけです。だからあきらめることはない。われわれの時間は短いけれども、法蔵菩薩の時間は兆載永劫ですから。その永劫の時間のなかに、われわれの一念一念が、少しずつ目が覚めるように導かれていくのではないかと思うのです。

そういうふうにゆっくりと仏教を聞いていくことです。現代のこの忙しい時代に、何をゆっくりやっているのだと思われるかもしれませんけれども、そういうものなのです。忙しく生きたって、たかが知れている。短い人生のなかに何を歓びとするのか。短くてもよかったと。本当によかったと言えるものを見出すことが大事なのでしょう。

迷い多きこの人生だけれども、私は、親鸞聖人という方が本当に力を尽くして呼びかけてくださった、「愚かな人間だけれど、愚かなままで歓べる道がある」ということが、本当にありがたいと思っております。皆さま方も、難しい時代ではあるけれど、ご自分のそれぞれの人生に、何がしかそういう光のあることに触れていただけたらと、願って止まないことであります。　（文責：親鸞仏教センター）

※本講座（第13回～17回）の詳細は、『現代と親鸞』第５号（2004年６月１日）に掲載の予定です。既刊号購読ご希望の方も、親鸞仏教センターまでお申し込みください。

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2004年3月15日(月)午後6時30分～9時
　　4月　　休講します
　　5月　7日(金)午後6時30分～9時
場所：有楽町・東京国際フォーラムG407
　　JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩１分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

凡夫に開く本願の花

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第23回から第25回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第23回では天親菩薩の『浄土論』の眷属功徳と受用功徳について、第24回では無諸難功徳について、第25回では大義門功徳について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは先に行われた第22回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

蓮の花

仏教は、悟りを蓮の花、蓮華に喩えます。蓮華というのは「淤泥華（おでいげ）」と呼ばれ、泥（どろ）田、曇鸞大師はそれを「卑湿（ひしつ）の淤泥」、湿って汚い泥と言って、凡夫の煩悩の喩えだと言うわけなのですが、そういう泥のなかに根をはって、茎を水面に出して、泥とはまったく想像もつかない色の花を咲かせる。泥田とはまるで異質の色、ピンク色あるいは真っ白や青い蓮華が開く。不思議なことですね。どうしてそんなことができるのかと思うのですが。

われわれ人間存在というものは、本当に汚い心で生きている。お互いに利用しようとか、心の裏には自分が得をしてやろうというものが、必ずくっついている。そういうものを汚いと言われたら、われわれは立つ瀬がないのだけれども、仏教からすると、「そういう身であることを忘れるな」と教えるわけです。仏が悟りを開くということは、ある意味で、一切衆生を救いたいという願いそのものになることだと言われるわけですが、そういう清浄なる願いに立って救おうとする相手は、まったく救いようのない煩悩の衆生である。煩悩の衆生とかかわったら、生半可な心では、そちらへ引きずり込まれてしまう。

ところが、蓮華というのは、まったくひどい状態から出て花を咲かせる。そういう仕事が、仏陀の仕事なのだと。きれいな場所を選んで咲く、これは当たり前な話だと。ところが、どうにも救いようのない地に根をはって、清浄な花を咲かせる。こうした仏陀のあり方を、蓮華のような清浄性で喩えるわけです。仏さまのお姿が、蓮台といって、蓮の華の上に立ち上がるというのは、そういう意味なのです。だから、「お前らは汚いから嫌だ」と言って、自分だけきれいなところへ行くというのは仏さまの心ではない。どれだけ煩悩の汚泥のなかにあっても、そこでこそ、本当の花を開かせようとする。そこには大きな矛盾がある。純粋清浄なるものと、濁って本当に汚いものとは絶対に矛盾する。その絶対矛盾を包んで、本当に成就しようという願いが、仏陀の願いなのです。

歩まされてある自分

『浄土論』に「如来浄華衆（にょらいじょうけしゅ）　正覚花化生（しょうがくけけしょう）」とあります。如来の浄土に生まれる衆生というものは、阿弥陀如来の正覚の花より化生すると。「化生」とは、卵生とか胎生などのいわゆる普通の生まれ方ではない。原因と結果が物質的に説明できない生まれ方を言う。浄土に生まれた衆生は、阿弥陀の正覚の花から生まれるのであって、人間の行為が報いて生まれるのではないのです。

自業自得の道理と言われますように、われわれからすると、自分の行為、自分の生活経験の結果で、次の自分に成っていくと。自分が碌でもないことをすれば、次に自分がそれで苦しむ。周りに迷惑をかければ、周りの人間から逆にやり返されて、結局、自分が痛い目に遭う。だから昔から、仏教のものの見方として、業の報い、「業報」という言い方をする。自分の生活経験の報いで、次の自分に成ると言うのです。

ところが、他力の救いは、この自業自得ではたすからないのだと言う。人間は、皆、地獄に堕ちるような行為を繰り返している。深い罪のいのちを生きている。自分は悪いことをしていないというのは、思い込みでしかない。このような人間を阿弥陀如来がたすけてくださるのだと。阿弥陀如来の本願が、「お前は、いらんことを考えないでよい。そのまま任かせなさい」と、こう呼びかけてくださる。論理として言えば矛盾である。自業自得の論理に矛盾している。けれども、自業自得で放っておいたら、人間は、誰もたすからない。

安田理深先生はよく言っておられました。あんたたちは、自分の意志でここに聞法しに来たのだと思っているか知らんが、しかし、ここに来ることができた背景ということを、よくよく考えてみなさいと。家を出るときに、誰かが尋ねてきたら、もう来られないではないか。誰も尋ねてこなかった。緊急の用事もできなかった。そういうことも、縁なんだと。あなたを来させたものは何だ。好きで来たのか。必ずしも好きじゃなかろうと。もっと好きなことは他にあるかも知らん。何でここに来たのだ。歩ませるものがあるからだ。聞きに行きたいと思わせるものがあるからだ。そこから聞法は始まっているのだと。そこに、もう法蔵菩薩が歩んでいるのだ。ここに来ているときだけが、聞法ではないと。こういうふうにおっしゃっていました。

これは、自分の思いよりも、もっと深いものが人間を生かし、人間を歩ませているのだという見方ですね。無数の条件が支えている。全部支えられてあったのだ。自分も歩まされてあったのだと。そのことをとおして、人間の妄念を翻せと。人間の妄念を破らせようという、そういう真理のはたらき、それを「本願」という言葉で教えるわけです。

本願の花が開くということ

曽我量深先生は、「浄土往生、往って生まれると言うけれど、往って生きるというふうに言ってみたい」とおっしゃっておられた。浄土の生は、そこで昼寝をするのではない。阿弥陀如来の願いは、如来の本願に感動して、その願いをもって菩薩道を行じてほしいということ、それが浄土の生である。だから、本願に感動して生きる苦悩の衆生が、阿弥陀如来の願いを証明するのです。証明すると言っても、自分が覚りを開いて何か教えるという、そういう意味ではない。愚かな凡夫として、阿弥陀如来の本願がかたじけないという心が開けるならば、阿弥陀如来の浄土の仕事を、本願を信じた凡夫が実証するということになる。

親鸞聖人が、『教行信証』の「行巻」に引いておられる偈文のなかに、「此の土で一人の衆生が念仏すると、彼の土で一つの蓮華が生ず〈この界に一人、仏の名を念ずれば、西方にすなわち一つの蓮ありて生ず〉」（『真宗聖典』180頁）という偈があります。此の土で、われわれの生活のなかに南無阿弥陀仏という声が起こる。そうすると浄土で蓮華の花が開く。これは詩的な語り方ですね。本願を信ずる衆生がいることが、本願の花が開くということなのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2004年6月7日(月)午後6時30分～9時
7月　　休講します
8月4日(水)　　同　上
場所：有楽町・東京国際フォーラムG407(6月) G405(8月)
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

信ずるということは、眼の転換

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第26回から第28回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第26回は「大乗」という課題について、第27回は「一切所求満足功徳」について、第28回は「故我願生彼　阿弥陀仏国（かるがゆえに我、願わくは、かの阿弥陀仏国に生まれん）」という言葉について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、その第27回の問題提起からその一部を紹介する。　（越部良一）

信心という問題

『浄土論』に、「衆生所願楽　一切能満足（衆生の願楽するところ、一切よく満足す）」とあって、「一切所求満足功徳」と呼ばれています。「願」も「楽」も願うことで、衆生が願う一切が満足する場所が浄土であると。実際には、われわれは、全然満足していないではないかと。絶対満足などあるはずがないと思っている、欲の骨頂であるような人間に、「一切所求満足」などと言っても、そんな話は虚偽だと。あるいは、理想の話などしたってしょうがない、もうちょっと身近な話を、というふうにしか見えないでしょう。

曇鸞は、「称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん」（『浄土論註』）という問いを出しています。無碍光如来、阿弥陀仏の名を称えても、相変わらず自分自身は無明であり、願いが満たされていない。しかし、それは名号の責任、如来の責任ではない。衆生の側に責任がある、と曇鸞は言います。どういう責任かというときに、信心の問題だと言うのです。

信心という問題はやっかいで、なかなかわからないのですけれども、悟りということが、仏教一般を成り立たせてきた一つの大きな言葉であるし、目標である。そういう、悟りというものが中心の宗教とは、現世に、自分の体験内に、無限と一つとなる体験をもつということです。ところが、悩み多き、欲多き、しがらみ多き生活をしながら、そういう体験をもつことは、ほとんど不可能である。

それに対して、親鸞という人は、愚かであり、流転の生活をしていくしかないような人間、その人間が、本願によって、そこに、その生活のままに、悟りと同じ利益を得ると。だが、それは悟りではない。それを言い表す言葉は、言うならば、ないのだろうと思うのですが、それを、「聞其名号　信心歓喜」という『無量寿経』の言葉、つまり、「信心歓喜」という言葉のなかに見いだした。それは普通の、いわゆる信心ではない。普通言われるような信心というのは、自分に都合のよいことを宗教から取ってくるというかたちの、利用、依頼心があるのでしょう。それは生死の問題といった自分の力を超えたもの、運命的なもの、それが自分に加勢するようにはたらいてほしいと頼む。自分を超えたような何かに頼む。言うならば、自分のエゴを消さずして、自分のなかに無限なるものを取り込もうという、そういう宗教との関わりです。

臨終まつべからず

ところが仏陀は、そういうものに依らない智慧というものを開くために苦労された。そうい

う智慧は、一切衆生がその法に依って、その道理、真理に依ってたすかるものだと宣言された。それを、親鸞は求め求めて、本願の仏教で本当に出遇った。たすからない人間であるということを、もう、骨身に浸みて知っていて、しかも、たすかるという道を親鸞という人は発見した。これは、すごいことだと思うのです。

ではそれを、どういうふうに表現していくのかというときに、おそらく親鸞聖人も随分苦労されたと思うのです。言い過ぎれば、誤解される。言わなければ、せっかく本願に触れた歓びというものが伝わらない。せっかく歓んでいるのに、“やはり、救いは死んでから後か”というような話になったら、何のために、いま出遇っているのだと。いま念仏しておいて、貯めておいて、臨終に役立つぞというような、そんな根性で称えているのかと。そうではないのです。

親鸞聖人が、一念一念信心歓喜しているということは、その信心歓喜に救いがあるのです。その救いの意味は、「回向」でしょう。如来回向。如来が来てくださるのだと。無限は、有限の外にあるように見えるけれど、外ではない。有限を包んで、ここにはたらいているのだということが、回向ということです。

その構造が難しいですね。真実信心と大涅槃のさとりとは、直に接している。接しているけれど、取り込んではいないという関係で、いまを歓んでいけるということをどういうふうに言えるのか。ここを、親鸞聖人は、分限を押さえながら、しかし、あまり遠慮せずに積極的に言おうと。浄土教と言えば、死んでから後だというふうに思われているけれど、救いは死んでから後ではない。救いは現在にあり、臨終まつべからず（「臨終の称念をまつべからず」『尊号真像銘文』）、臨終が勝負だという宗教ではないのだと。

清沢満之の言葉

では、いま、たすかったのならば、いま、お前は仏かと。そういう意味ではない。仏ではない。けれども、仏になる資格はあるのだと言うのです。資格があればそれでよい。仏になるとがんばらなくても、もうよいのだと。愚かで罪深い、哀しい身であるけれど、そのままに、無限なる慈悲が、ここにはたらいてきているという事実をいただいていけばよいと。

これが、清沢満之先生の次の言葉（「臘扇記」）にもよく出ています。「請う勿れ、求むる勿れ、汝何の不足かある。若し不足ありと思わば是れ汝の不信にあらずや」と。こう言わざるを得ないのは、やはり、欲しい、求めるという心が湧いてくるからです。けれども、それを「不信」と言っているのです。如来に対する絶対の信頼がないと。それは、如来に対しての反逆ではないかと。けれども、如来は衆生のそういう反逆も罪も、全部許そうと。しかし、「汝の苦悩を如何せん」。そうやって、一人でもがいているものを救うことはできないよと。勝手にもがいているのだよと。こういう表現です。

信ずるということは、眼の転換を言っているのです。私どもの発想の転換です。だから、こちらから信ずるのではない。如来回向の信心だと。如来から信じられていると。如来から与えられているということに、頷くしかない。どういう状況だからだめだとか、どういう状況なら良いという話ではなくて、どういう状況であろうとも、状況を否定媒介にしながら、絶対満足をそこにいただくという、そういう智慧が、本願の智慧として教えられているのではないかと思うのです。　（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、11月5日は、下田正弘氏（東京大学大学院助教授）、菅原伸郎氏（元朝日新聞学芸部記者）をお招きし、「科学技術文明と現代の不安2―知によって覆い隠された世界と宗教―」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2004年9月16日㈭午後6時30分～9時
　　10月15日㈮　　同　上
　　11月　5日㈮午後5時30分～9時
場所：有楽町・東京国際フォーラムGブロック
　　JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

わが身を引き受ける本当の自信

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第29回から第31回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第29回は天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、われわれが感ずる意識のレベルを超えることと「座功徳」の問題について、第30回は「身業功徳」について、第31回は「口業功徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第28回の問題提起からその一部を紹介する。　（越部良一）

「我」の意味――有限なる身の自覚

この間、この集まり（連続講座「親鸞思想の解明」）にもよく来てくださった、東京大学で倫理学の教授をしておられる竹内整一先生とお会いして、お話しておりましたら、大変な疑問を出してくださったのです。それは、仏教は「無我」、「諸法無我」と言う。これは根本テーゼ（These）であるのに、清沢満之は「我」と言う、と。その我が残っているのはどうしてですか、とおっしゃられた。これは非常に大事な問題なのです。

確かに清沢満之は、「我他力の救済を念するときは、我が処する所に光明照し、我他力の救済を忘るゝときは、我が処する所に黒闇覆ふ」（「他力の救済」自筆原稿）というように、「我」、「我」と繰り返すわけです。これは清沢満之だけの問題ではない。親鸞が、『歎異抄』で「親鸞一人がためなりけり」というように、親鸞、親鸞と名告っていますし、さらには、『浄土論』でも、偈文で「我」が繰り返し出てきます。「世尊我一心」と、そこから始まって、「故我願生彼　阿弥陀仏国」、我が願生すると。曇鸞大師は、それは単なる文法上で「我」と言っているだけで、重い意味で自我を主張しているわけではないというように理解しています。けれども、それだけではない大事な問題ではないか、と私はかねてから思っていたので、竹内先生の疑問をいただいて、はっと思い当たるところがありました。それは、浄土の教えというものと、それに出遇う自分というもの、その教えの成り立ちです。

「諸法無我」というのは、存在の真理であるし、お釈迦さまが教えられた自己認識でもあるのでしょう。真理として、我はない。われわれは執着してやまないけれども、実体は何も無いのだと。永遠にあるものなど何も無いというのが「無我」です。

しかし、教えられても教えられても、真理に立つことができないというのが、この愚かな人間である。だから、親鸞という人は、この浄土の教えは、言うならば、他の道から落ちこぼれた人間、あるいは、他の道では自分を成就できないという自覚ができた人間が出遇う教えだ、というふうに押さえたわけです。これが、「我」という立場をなくさない浄土の教えというものをいただく、大事な一点だろうと思うのです。

その「我」の内容は、立派な我ではなくて、有限なる身をもった我です。善導大師が、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」（『真宗聖典』215頁 東本願寺出版部）という、そういう内容を孕んだ「我」なのです。

仏教の意欲、菩提心の要求を、「出離生

死(じ)」という言葉で言い当てるわけですが、それは、人間の生きてあること自身が迷いであり、その迷っているいのちから目覚(めざ)めたいという要求です。こういう要求を、自分自身の要求として生きようという関心をどこかで感じないと、仏教の教えは聞こえないのです。これを感じたうえでの話になるわけですが、善導大師が「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」と言ったときには、出離の縁がない。出離の可能性を呼びかけている仏教一般の教えに出遇いながら、迷いのいのちを離れて無限なる世界へと超え出ることができない。そういう悲しみの身の自覚です。そのときに、この往生浄土の道を選び取れということが、一つの方法論になるわけです。

本当の自信

有限から無限にはとどかない。けれども、その有限と無限の関係をわたそうとして、われわれからはいけないけれども、向こうから来てくださっている。無限の側に包み込みたい、衆生をたすけたいという願いの側から、教えが出ている。その願いの前に立った我が、願いとぶつかる、そこに「我」という名告りがある。迷っているいのちのただ中に、如来からのはたらきを、いま感じ取ったら、いまここにたすかっていく。けれども、たすかり終わって、向こう側にいくのではない。そこに「我」という字が、必ず付くわけです。無我になってしまうというような、抽象的なことにならない。

この「我」は、たすからない我、煩悩の我。けれども、そこにたすかっていると。「我他力の救済を念するとき」、もうすでに、ここに光が来ていると言い得る。言い得るけれども、忘れるとき、やっぱりたすからない黒闇の身だと。だからまた念ずる。念ずればまた光があると。それでは、ただウロウロしているだけではないかと言われるかもしれませんが、そうではない。事実、迷いを生きているのだけれども、如来の願いがいつもはたらきかけてきていることを感ずれば、ここにもう救いが来ている。

曽我量深先生がよく言っておられました。「機(き)の深信(じんしん)」は絶望ではない。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」と本当に頷(うなず)くということは、「ああ、もうだめだ」という、自暴自棄のようなものではないと。それは、絶望ではなくて、そういうたすからない身であるということを、本当にありがたい身として引き受けられるのだと。

「機の深信」を、親鸞という人は「深信自身」(『愚禿鈔(ぐとくしょう)』『真宗聖典』440頁)、自らが自分自身を深く信ずるというふうにうなずかれた。自分を信ずるというと、普通は、「能力があると信ずる」とか、「少しは、ましだと信ずる」とか、そんなふうに信じようとする。けれども、それは所詮、有限です。人と比較して「ちょっとはましだ」と信ずるのは煩悩です。比較心がついているから、自分よりもっと大きいものに出合うと、がっくりして絶望する。揺れ動いているだけで、自信にはならない。

本当の自信、本当に自分自身が、「これでよい」と言うのには、もっと深い自覚がなければならない。機の深信は、決して絶望ではなくて、本当の自信なのだと。いくら反省しても、反省の下から煩悩が出てくる、そういう愚かな身である。けれども、本願の呼びかけをここに感ずる。煩悩の身であるからこそ、ここに感ずると。そのように、無限なるはたらきが、自分の前に本当に与えられてあるということに立つとき、初めて愚かなこの身が引き受けられ、本当に自分が信じられるのです。

(文責：親鸞仏教センター)

※本講座の詳細は、『現代と親鸞』に掲載しています。FAX・ハガキ・E-mail のいずれかで、同センターまでお申し込みください。

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2004年12月　6日(月)午後6時30分～9時
2005年　1月14日(金)　同 上
2月14日(月)　同 上
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

南無阿弥陀仏

―本願自身がはたらき出る行為―

親鸞仏教センター所長　本多弘之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第32回（第32回のシンポジウムは、本紙12頁を参照ください）から第34回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第33回と第34回は、「心業功徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第31回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

念々にいま

大変、難しい疑問をぶつけられたことがあります。それは、「大悲であり、無条件だと言うのなら、念仏も要らないではないか」と。「何も要らないではないか」と。そのとおりです。だけど、「何も要らない」と言われて、頷けるか。例えば、母子であれば、ニコッと笑っているだけでよいという、そういう関係があるかもしれない。でも、苦悩の衆生が大悲を感じ目覚めるというときに、何も無くては、たとえ大悲に救われているのだと頭で思ってみても、身が頷かない。

人間は、無条件ということを自覚するためには、何か一つの条件を潜ることが必要なのです。これは、なかなか面倒なことです。何か外に立てられた無限という形がないと、われわれはぶつかりようがない。ただ、無限の荒野に向かって立ったときの不安のようなもので、「自分がそこにあることでよいのだ」とは、とても気づけない。ただ、さまよっていくだけになってしまう。

「名前なんて要らないではないか」、あるいは「名を一回称えたら、もうあとは何も要らない、もうたすかっているのだ」と、そういう誤解も生じ得る。けれども、それは人間の傲慢性である。例えば、「食事は一遍食べればいい、腹いっぱい食べればそれでよいのだ」と言って、それで済むのか。人間は、時間を生きる存在だから、たちまち腹がへってくる。あんなに腹いっぱい食べたのに、次の日までもたない。そういう人間が、一回称えて、そのあとずっとたすかるというようなことはできないのです。すぐにまた、愚かな考えが起こってくる。我執が復活してくるし、いっこうに治らない深い罪が、人間全体を包んでしまう。

だから、いつもいつも間違いが照らし出され、傲慢さが叩き伏せられて、本当に愚かな自分がいつも感じられるというはたらきをどこかにもたないと、存在自身の尊さを本当に感謝していただくという生活が、現実のなかに足を降ろすことはできないのです。言うならば、海岸の砂に字を書くように、何回書いても、海の水で消えてしまう。そこにまた字を書くように、「念仏生活」は、念々にいま、念々にいまとして、しかも一番やさしく、いつでも、どこでも、誰でもできる方法として与えられている最良の方法である。こういう生活が、本願をいただいてきた歴史の頷きであったのだろうと思うのです。

主語なき行為

念仏は「易行」である、ということが繰り返し言われる。しかし自分がなす行為が、たとえ易しくとも、「すごい行為なのだ、お前らの

行為より勝れているのだ、俺がその行為をするのだ」というふうに自己評価をすると、念仏で自分を誇りにするということですから、そういう念仏を、親鸞聖人は注意深く批判されるわけです。念仏を称えることにおいて、如来の願いを聞いていく。そのことを忘れると、行為を己が行為としてしまう。そうすると、何のことはない、他の行為をなすのと質は同じなのです。

その行為が如来の願いである。つまり、「一如」のはたらきである。人間の我の行為ではないのだと頷くための手がかり、「俺が、俺がという思いがまた立っているな、この俺が間違いなのだ」と、うながすための手がかりとして、「南無阿弥陀仏」という言葉があって、その言葉において我執が破られ、光の世界のはたらきを回復してくるのです。

そのための行為ですから、行為にして行為ではない。人間の行為ではなくて、人間を超えた如来の行為である。私の口をとおして発音するから「私の行為だ」と思った途端に、それは如来の行為ではなくなる。面倒な話です。だから、主語なくして起こる行為、本願自身がそこにはたらき出る行為、そういうふうに親鸞は「南無阿弥陀仏」を押さえられた。人間の思いで「どうにかしよう、ああしよう」という発想で何かをするのではないのだと。

だから、「難信」なのです。信じ難い。われわれからすると、立派なことや難しいことをすれば、それはすぐにわかるし、目に見える。だけど、念仏するということは何の意味だと。だから、教えを聞いても聞いても、そういう疑いがなかなか晴れない。一番やさしい方法を選んだけれども、人間にとっては一番聞きにくい。なぜなら人間は、傲慢で、賢いと思いたいものですから。そして、難しい行為をなしてこそ価値があると思うものですから。

大勢の求道者の伝統

理性からするとわからない。「なぜ名前を称えればよいのだ」と。いくら考えてみてもわからない。わからないのだけれども、大勢の求道者が頷き、自らもそのことを実践して、大悲本願をいただいて喜んで生き、喜んで死んでいった。そういう伝統のなかに、われわれは漸くにして、「ああ、南無阿弥陀仏という御名が尊いのだな」ということを少しずつ頷かされる。

「南無阿弥陀仏」という名の発音を聞くのは、自分に先立って、それをいただいた方が称えていることをとおして聞くのです。具体的に本願を信じ、念仏して生きている、そういう方々の発音をとおして聞こえてくる。そのことで、本当にこころの暗い、濁世を生きる罪業深重の存在であるわれわれが、阿弥陀の御名が尊いものだということに頷けるようになる。

われわれ愚かな凡夫が、本願を信じて念仏する。ちょっと見たら、愚か者が何か発音しているというだけのことにも見えるような行為をとおして、実は、一切衆生を救いたいという願いを、如来はどこまでも響かせていこうとされる。聞く側からすると、自分に先立って本願に触れてくださった方の、名を発音する声を聞いて――十方衆生はその声を聞いて――、また、自分も本願をいただく存在に漸く成っていくことができる。人をとおして、人を信頼して、名号が、大悲が、人間のうえに頷かれていく。私のなかに、自分を破って、自分で作るわけではない「如」の声が響いてくる。言葉なき言葉が響いてくる。そして初めて、「ナンマンダブツがかたじけない」ということが起こってくる。そういうことだろうと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2005年3月14日(月)午後6時30分～9時
4月　休講します
5月13日(金)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」

本願の信心—矛盾のままにたすかる

親鸞仏教センター所長　本多弘之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第35回と第36回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第35回は、『浄土論』の「大衆功徳」について、第36回は、「上首功徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第35回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

矛盾を生き、矛盾を破る論理

今日、親鸞仏教センターで、清沢満之先生の書かれたものを学ぶ研究会をやっておりました。清沢先生は、「無限」と「有限」という概念を立て、無限と有限というものは矛盾すると。つまり、有限は無限ではない。無限は有限ではない。けれど、無限というからには、有限が外側にあるはずがない。全部の有限を包んでいなければ無限とは言えない。しかし、有限が無限のなかにあるのだったら、有限と言えるのか。そういう矛盾がある。

有限と無限は矛盾なのだけれども、事実として一致するということがないならば、仏教は成り立たない。そういうことを語ろうとする。そうすると語れないのです。矛盾しているのだから、言おうとすれば比喩でしか語れない。けれど事実は、矛盾を超えて生きている生命がある。そういうことを何とか語り抜こうとしているのだけれど、読んでもさっぱりわからない。無限は無限、有限は有限、とわれわれは思っていますから。だけど、有限は本当は無限なのだ、無限は本当は有限なのだと。

善導大師に、「弥陀の智願海」（「往生礼讃」『教行信証』「行巻」に引用。『真宗聖典』174頁）という言葉があって、その「願海」ということで言うなら、願海の外に衆生はいない。どんな衆生も願海のなかにある。願海が浄土である。願海が浄土であるなら、どんな衆生も浄土の外にはいない。ところが、われわれは、浄土というようなものでない穢土のなかで、比喩的に言うなら、傘もないのに土砂降りの生命を生きている。では、どこに浄土があるのか。でも、願海からすれば、どこであろうと浄土のなかである。これは矛盾するわけです。

人間の考えからすると、いまの世界にないから、どこかにあると。無限を有限の外側に立てるしかない。外側に立てた無限には、無限の距離があり、無限の時間がかかり、有限からは絶対にいけない。有限の努力をいくら積み重ねても有限だから、無限にはならない。けれど、そこに無限が有限にはたらく。無限に背こうとも、無限に反逆しようとも、無限と別なる有限はないというのが大悲ですから。

そうすると、浄土の衆生と言うけれど、それは実はわれわれなのだと。この愚かで罪深い心の暗いわれわれが、一切の河を飲み込んで、海の水にするような願海の大きなはたらきを感ずるならば、本願のはたらきのなかに自分を見いだすならば、浄土の衆生のなかにいるのであると。

ではもう、浄土に生まれたのかというと、そこが難しいところです。われわれは、凡夫の生命を生きている。そのことは止められない。煩悩のいのちであることを忘れてはいけない。だ

から、もう浄土に入ったとは絶対に言わない。煩悩のいのちでありながら、浄土の功徳をいただく。矛盾しているわけです。矛盾しているけれど、そこに「南無阿弥陀仏」が願海のはたらきとして来るのだと。こう信じて、苦悩のいのちを転じて、海のはたらきを感ずる場としてくれる。そういう、転ずるはたらきを感じながら生きることが信心なのです。

本願のはたらきを信ずれば、矛盾は矛盾のままに破られていく。だけど、矛盾がないとは言わない。やはり矛盾なのです。そういう矛盾を生きていく論理が、信心の仏法だろうと思うのです。まあ、大変難しいと言えば難しいのですが、本願を信ずるということは、そういう意味をもっているわけです。

悲しい事実があって、しかし嬉しい

親鸞聖人は、徹底的に言葉と論理を大事にされるのですが、単なる論理ではない。やはり論理を尽くしながら、論理でいくところまでいって、それを超えて、矛盾を超えるような体験を与えようというところがある。

それに触れないで、矛盾のままに理解しようとすると、凡夫で穢土に生きているのだから、浄土に生まれないのだから、功徳がないのだから、死んでから後だ、と言わざるを得ないのです。愚かな凡夫であるから、浄土の功徳が来るはずがない、浄土の功徳は死んでからだと。そういうふうに言葉をいただいてしまう。それは、どこかで本願を自分の外に置いているからです。死後の浄土などと言っているのでは、親鸞聖人の思想の大事なところを消してしまっているのではないかと思います。

一面、そういうふうに、死後というかたちで表現しなければならない課題は、生きている間は、いわば泥田に足があるからです。けれども、本質はどこにあるかと言えば、泥田のままにたすかる、ということを言いたいのでしょう。泥田にいるから、お前は穢土だ、死んでからたすけてあげようなどと、親鸞聖人がおっしゃるはずがない。それは本末転倒です。つまり、一番大事なところを読まないで、言葉の端だけを掴まえてきて、やはり、死後往生を言っていると。そんなことを鬼の首を取ったように言う人がいるのですけれど、親鸞聖人が、そのために、こんなに苦労してものを書くでしょうか。何のために書いているのかということです。

それは、愚かな凡夫がたすかる道を与えたいと。苦悩のいのちがどれだけ汚(きたな)かろうと、どれだけつらかろうと、そこにすでにたすかる道が与えられているからでしょう。だから、鈴木大拙先生が、「行」を“Living”と訳すのは、よくわかるのです。本願に触れて生きているのだと。本当に念仏が生きていれば、そこに救いがあるのだと。そういうことを、親鸞聖人は言い続けておられます。

ただ間違ってはいけないのは、だから俺が仏に成ったとか、何か、そういう偉い様になる論理ではないのです。泥田を生きていることは変わらない。凡夫であることは変わらない。「悲しきかな、愚禿鸞(ぐとくらん)」(『教行信証』「信巻」『聖典』251頁) という、その事実は少しも変わらない。にもかかわらずというのが、大事なのです。だから、讃嘆(さんだん)と懺悔(さんげ)が一つになっていると言われるのです。悲しみがあって、悲しみが無くなるのではない。悲しいのだ。悲しい事実がある。しかし嬉しい。だから、矛盾のままにたすかるということを明らかにしようと、一生ご苦労された。これが、親鸞聖人の本願の信心のすごいところだと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2005年6月20日(月)午後6時30分～9時
7月 1日(金)　同 上
8月18日(木)　同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

苦悩の衆生に名を讃められよう

―大乗の悲願―

親鸞仏教センター所長　本多弘之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第37回と第38回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第37回では『浄土論』の「主功徳」について、第38回では「不虚作住持功徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第37回からその一部を紹介する。

（越部良一）

衆生が讃めるところに阿弥陀はします

『浄土論』で「荘厳主功徳成就」という言葉は、二度出てきます。一つは、環境世界の如くに浄土を荘厳する「器世間清浄」のなかに出てまいりましたが、今度は、「衆生世間清浄」、あたかも人間関係の如くに浄土を荘厳するその一つに、また主功徳ということが言われてくる。環境世界に立ち上がった主体、環境世界に立ち上がっている如来自身を主功徳として語るわけです。「天人丈夫衆　恭敬遶瞻仰」（『真宗聖典』137頁 東本願寺出版部）と。

天、人という言葉で、浄土の衆生を表し、丈夫とは強い人という意味ですが、強いというのは、体力とか意志力とかではなく、菩提心を表すわけです。自らが覚りを開くと共に、一切衆生をたすけたいという、そういう願いを成就することは、いわゆる有限な力では不可能である。にもかかわらず、その志願に立ち上がって、それを成就しようとする。そういう菩提心をもった丈夫衆が恭敬する。そして、まわりをへめぐりながら、瞻仰する。拝み崇める。阿弥陀如来がおられるそのまわりを、無数の衆生が尊敬して、拝みながらまわる、そういうイメージです。

阿弥陀如来は何であるかというときに、阿弥陀如来自身はこういうものだと言わずに、浄土の衆生がそのまわりをまわって尊敬するのだと、こういうふうに荘厳する。

これは何を象徴しているのか。本願で言いますと、私はこれは十七願（同18頁）だと思うのです。十七願は、「諸仏称揚の願」とか、「諸仏称名の願」とかと名づけられておりますけれども、阿弥陀は、諸仏に自分の名を称えてほしい。つまり、名を与えたい。それに応えて、諸仏が阿弥陀の名を称えてくださると、その時に、自分は、阿弥陀仏になりましょうと。阿弥陀というものが、どこかにあってというのではなく、無数の諸仏がおられるところで、その無数の諸仏が讃めるところに、阿弥陀が阿弥陀仏として成就していく。

阿弥陀ひとりがいて、そのまわりをたくさんの存在が、みな瞻仰して歩くというと、この世的にイメージすれば、あたかも一人の独裁者がいて、そのまわりをみんなが這いつくばって付いていくという、そういうイメージになるわけですが、そうではない。この世的に表現すると、そういう表現しか取れないかもしれないけれども、そうではなくて、むしろ一切衆生の苦悩の根本に沈みたいわけです。一切苦悩の衆生をたすけるためには、一切苦悩の衆生に自分の名を称えてほしい。称えようと思いたつこころのところに、自分が立ち上がるのだと。そういう方法で、大乗の悲願を兆載永劫の未来にわたって成就していきたい。こういう願いが、阿弥陀の本願だろうと思うのです。だから、独裁国家をつくって一切の衆生に自分の言うことを

聞かせるというイメージになると、これは何の意味もない。そういうことが浄土なのではなくて、浄土は、よく見ると阿弥陀自身は、言わばいないわけです。阿弥陀自身を語ろうとすると、まわりをグルグルと衆生が尊敬してまわっている、その真ん中にいそうだけれども、真ん中のことは語っていないわけです。これは次の「不虚作住持功徳」でも、「仏の本願力を観ずるに」（同137頁）と言って、阿弥陀を観るとは言っていない。もちろん、阿弥陀は本願力なのですけれど、願がはたらいているということをもって、阿弥陀とするわけです。

天人丈夫衆も自分を立てる必要はないわけです。阿弥陀を讃めていればよい。阿弥陀も自分で立つのではない。天人丈夫衆が讃めるところに、阿弥陀がましますわけです。何か、そういう不思議な信頼といいますか、自分が立たなければどうにもならないといった我執から起こる信頼ではなくて、存在の真理に触れて存在を信頼するということから出てくるような、無理のない呼びかけなのではないかと思うのです。

浄土とわれわれの生活の響きあい

現生正定聚と、この主功徳とは、別ではない。どうも親鸞聖人の言葉を読んでおりますと、彼の土の衆生と、この穢土の衆生とは因果で関係している。ということは、別ではない。しかし位は違う。その違いにおいて、有限であるという自覚をもつ。罪が深い。「悲しきかな、愚禿鸞」（同251頁）と。でも、本願に触れた言葉としての「悲しきかな、愚禿鸞」は、明るいのです。一人でもがいているのではないのです。悲しいのは事実だけれど、そこに如来の本願に照らされている明るみがある。だから、悲しいままに歩んでいける。絶望して止まってしまうのではなくて、無限に大悲をいただいて、悲しい生命を歓んで生きていける。

こういう道が、この天人丈夫衆と響きあっている。われわれが本願の大悲を讃仰する、讃めたたえていくという生活と、浄土の衆生が天人丈夫衆として阿弥陀を恭敬している姿とが、響きあっている。実体的に一つだとか、同じだとか、もうここが浄土だとか、そういうことを言う必要はない。限りなく遠く、終わりがない。まったく異質で遠いのだけれど、本願のはたらきをいただけば、響きあっている。そこに安心して、われらはわれらの分限を歩んでいける。遠い存在を、遠く離れていて手が届かないと歎く必要がない。本願他力を念ずるときには別ではないという、不思議なはたらきがここに来る。

隣に親鸞が居る

親鸞の伝説で、一人居ると思うなら隣に親鸞が居る、二人居るなら三人居ると思えと、そういう言葉が伝えられています。自分はどこに居るかといったら、念仏する人の隣に居るよと親鸞が言ったと（「一人居て喜ばは二人と思うべし、二人居て喜ばは三人と思うべし、その一人は親鸞なり」「御臨末の御書」）。そういうふうに信じられて伝えられてきている。本願を生きた親鸞は、親鸞という名が付けられた肉体はなくなったけれども、親鸞の願いとして立てられた親鸞の名は、それを信ずる人が陸続と続いていく限り、生きているわけです。その願と共に生きてはたらくわけでしょう。そこに阿弥陀があるわけでしょう。だから、この主功徳の語り方というものは、私は面白いなと、また有り難いものだと思うわけなのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、11月29日は、國府田隆夫氏（東京大学名誉教授）、斎藤勝治氏（放送衛星システム顧問）をお招きし、「科学・哲学、そして宗教の間の対話を求めて―科学者は現代の情況に免責か？」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2005年　9月　　休講します
10月21日㈮午後6時30分～9時
11月29日㈫午後5時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

ここに居ることに無限の意味を見いだす

親鸞仏教センター所長　本多弘之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第39回から第41回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第39回は『浄土論』の「不虚作住持功徳」について、第40回は『一念多念文意』と不虚作住持功徳について、第41回は「菩薩功徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第39回の問題提起から、その一部を紹介する。（越部良一）

本願力回向

不虚作住持功徳の文言は、「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」（『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部）、「仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし」、そして「能く速やかに功徳の大宝海を満足せしむ」と。「本願力」という言葉は、『浄土論』中ではこの部分と、あとは偈文についての注釈の最後のほうに「本願力回向」と、その２回だけ出てくる言葉です。最初の「観」という言葉を、親鸞聖人は、「遇」の字とあわせてご覧になっていて、単に心で何かを見て観察していくという人間の努力ではなくて、本願力に遇うことだと。本願力に出遇うというのは、一般の浄土教の関心からすれば、あの世に往ったら出遇えるのだと、こういうふうに考えるのでしょうけれど、それを、「本願力回向」という言葉から、親鸞という人は見直した。

如来の、どこまでもたすけずんば止まん、とはたらく願いが回向なのだと。如来の大悲は、われわれが知るも知らざるも、いつもわれわれにはたらき、われわれに呼びかけている。この回向のはたらきに、われらが値遇する。このことと「遇無空過者」と言われる「遇」とは、別なことではない。まあ、自力で言うなら、浄土に往って菩薩になって、それから出遇うと、そういう話になるのでしょう。けれど、『浄土論』をよくよく読んでみると、大悲が衆生にはたらきかけるということを語ろうとする論であると。愚かな身のところに、いま出遇えるのだと。それは、凡夫からは往くことはできなくても、大悲からは来ているのだということを実感できる、そういう教えです。

この本願力回向を抜いたら、親鸞聖人という人の言葉は、大事な中心を抜いた家みたいなものです。本願力回向が、親鸞という人の思想を建てているわけです。それをはっきりといただかないと、それに出遇わないと、親鸞聖人がおっしゃる、凡夫で生きていて、本当にそこにそのまま救いがあるという、そういう道が開けて来ないのではないかと思います。

大事な、大事な荘厳功徳

私たちは、目の前にあるさまざまなことで悩み、目の前にあることが、何とかなればたすかるのではないかと思っている。けれども、本当は、目の前にある問題は、有限の問題とはいえ、ほとんど解決しない問題ばかりです。まして、われわれは、自分の思うままにならないさまざまな条件を与えられて生きて、もがいている。自分の思うままになる条件なら、たすかる

と思うけれど、本当はそうではない。思うままになるということはないし、もし、思うままになる世界があったとしても、人間は堕落するだけである。つまり、歩まなくなる。

宗教的なものに触れてみると、人間はたすかるということはないのですね。常に、何か深い悩みを、深い矛盾を孕んで生きているものなのです。「ああなったらいいだろう」「こうなったらいいだろう」と言うけれど、どうなってもだめなのです。だから、お釈迦さまは「生老病死」と。生きているということが矛盾であり、そこに病気等があって、思うままにならない。だから、生きていることは苦悩なのです。それでは、死んだらいいか。安田理深先生は、死んで解決すると思うのは、本当の解決ではないのだと、繰り返しおっしゃっていました。一時停止みたいなものだと。逃げただけのことである。この苦悩の根源を本当の意味で見定めて、そこから立ち上がり直すことができる道が、仏陀が教えてくださる道である。これに出遇うまでは、われわれは歩むしかないと。

われわれは、いつも何か時が瞬(またた)く間に過ぎていってしまって、無駄に過ごしたなと思う。どれだけ充実していると思っても、顧(かえり)みると、何か速いと言いますか、何をしていたのかなという感じですね。一向に満ち足りないで、瞬く間に時が過ぎて人生を終わってしまう。だから、何とか満たそうとして、いろいろやるけれども、それでも何となく過ぎたなと。そういうのが人生の悲しみだろうと思うのです。

そういうものに対して、“空しく過ぐる者はない”という信を与えるのが、本願力なのだと。これに出遇えば、無駄なものは一つもない、そういう実感が与えられると。つまり、苦悩が無くなってたすかるのではなくて、苦悩も悲しみも、すべてが意味をもって甦(よみがえ)ってくる。こういう人生が開けるのが救いだというのが、親鸞聖人が生きた道であり、われら凡夫に教えてくださる道だと思うのです。

私たちは、苦悩が無くなって、立派な人間になってたすかるのだと思うから、いろいろな善を積もうとするけれど、どれだけ愚かであろうと、どれだけ無駄なことばかりやっていようと、実は一つも無駄ではないという眼が開き直されてみたら、ここに居ることの意味がまったく変わるわけです。どこかに往かなければたすからないのではなくて、ここに居ることに無限の意味がある。そういう眼が与えられてくるなら、どこかに逃避してたすかるという発想ではなくなるわけです。そういうふうに翻(ひるがえ)って、ここに居ることをいただける眼が与えられる。それが“回向に値遇する”ということなのだろうと思うのです。

本願力に遇うなら、「しらず、もとめざるに、功徳の大宝(だいほう)、そのみにみちみつ」(『一念多念文意』同544頁)と、親鸞聖人はおっしゃる。われわれには見えない。求めてもいない。大体、知らない。けれども、本願力に出遇えば、そういうふうに身が拝めますよ、と言うわけです。拝めるような心で見直してみると、わが身だけでない、一切の衆生の身が、尊い身として拝めるようになる。大悲が願っているこころが、少しく感じられるようになる。大転換の眼が与えられるのが、回向の事実である。だから、回向という一点を忘れたら、親鸞聖人を見る眼は無くなるわけです。どれだけ親鸞聖人が、この不虚作住持功徳の言葉を喜ばれたか。これは大事な、大事な荘厳功徳だろうと思います。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2005年12月20日㈫午後6時30分～9時
　　2006年　1月17日㈫　　同　上
　　2月10日㈮　　同　上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
　　JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

この身は本願のはたらく場所

―往くのも還るのも本願力―

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第42回（第42回のシンポジウムは、本紙12頁を参照ください）から第44回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第43回と第44回は、「荘厳菩薩功徳成就」の第一首について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第41回の問題提起（「二種回向〈往相回向と還相回向〉」）からその一部を紹介する。

（越部良一）

往還の対面

往相の回向というのは、私どもの煩悩の生活を突破して、大涅槃の果を得しめる。還相の回向は、逆に真実証の側からはたらいて、普賢の徳を修すると、こういうふうに親鸞は顕らかにしてくる（『教行信証』「証巻」に曇鸞の『浄土論註』を引文。『真宗聖典』286頁、東本願寺出版部を参照）。大涅槃を得るということ自身が謎みたいなものでしょう。その上、大涅槃から還ってくる。これは謎のまた謎のようなものです。これを、死んで浄土に往って、還ってくるのだと解釈してしまうのは、一つの解釈であって、回向は如来の大悲のはたらきを語るわけだから、そうした考えを少し変えなければいけないのではないかと思うのです。

曽我量深先生は、どういうふうにこれをいただかれたかというと、往相還相の回向は、往還の対面だというふうに言ったのです。この考え方のヒントは、もう60年も前ですか、進駐軍が入ってきたときに、それまで日本人は左側通行であったのですが、右側通行にしろと。それで、「人は右、車は左」というような標語を作った。人は車と対面して歩けば危なくないと。その標語を曽我先生は、ああ、これが往相の回向、還相の回向の考え方だと。つまり、往かしめるはたらき、往相と、還らしめるはたらき、還相とは、われわれの上で出遇うのだと。われわれに往相の回向がはたらくと、われわれに教えてくださる還相のはたらきが来て、ぶつかる。念々に往還がぶつかる場所に、われわれは生きる。往還の対面ということをおっしゃったのです。

これは、一つの考え方です。単に往相の結果、還ってくるというように、自分が往ったり来たりするのではない。自分は往くのみである。親鸞聖人という方は、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」（『歎異抄』同628頁）という言葉もありますけれど、自分は師匠にはならずに、凡夫として求め続ける。如来の教えに遇っていくのみである。それでは、自分だけが求め、自分だけがたすかって、他の人を見捨てていったかというと、決してそうではない。向かい合って教えてくださる以上に、われわれに教えを与えてくださった。つまり、「後ろ姿が人を育てる」と、よく言いますよね。つい、われわれは、前向きになりたがる。「お前はだめだ」とやりたがる。だけど本当は、人はそれでは育たない。人をつぶしてしまう。自分は求める。求めると、人も「ああ、そうだな」と求めてくださる。その求めさせるはたらきは、本願力である。人が引っぱるのではない。人を生か

している真理が、他の人も生かしていく。

曽我先生が言われるように、自分は往相の回向をいただけば、還相の回向に値遇（ちぐう）する。還相の回向に出遇っていくのだと。曽我先生は一貫して、真実証から教えが出てくるのだと。如来の教えは「証」から、「さとり」から出てくる言葉、大涅槃の果から出てくる言葉だから、われわれを育てることができるのだとおっしゃった。だから、本当にはたらくものは、還相の回向である。われわれは、それに出遇っていく力を与えられる。出遇っていく力が、往相の回向である。往還の回向は対面であると。これは曽我先生の代表的な考え方の一つです。

金子大榮先生の考え方は、親鸞が往ったように、みんな往くのだと。往かしめるはたらきが往相の回向である。その後ろ姿が、還相の回向だと。こういう考え方です。後から往く人間は、往相の回向の、後ろ姿の還相の回向に出遇うと。これも、わかったような、わからないような話ですけれども、わかると言えばわかる。

本願力のサンドイッチ

人間は真理を聞いていけばいいというのが、親鸞の姿勢です。その道を徹底した点が、すごいと思うのです。自ら凡夫だと言いながら、すごい凡夫です。徹底して凡夫なわけです。われわれは、すぐに凡夫を忘れる。忘れる凡夫ほど始末に負えないものはない。凡夫であることを忘れないということは、念仏の智慧なのです。

だから、本願力が往かしめるのであって、往くのも還るのも本願力なのです。凡夫は往きもせず、還りもせず、ここに居るだけです。ここに居る人間に永劫（ようごう）の信心が与えられる。そこに大涅槃が来ると。つまり、はたらいている場所は、私にはたらいている。往還二回向がはたらいている。だから、私はそれを信じていくことができる。「弥陀の回向成就して　往相還相ふたつなり　これらの回向によりてこそ　心行ともにえしむなれ」（「高僧和讃」同492頁）と。信心も念仏もともに、如来の往相還相の回向によって与えられるのだと。与えられる場所は、この凡夫である。だから、自分でする必要はなくて、本願力がはたらいている。こういう信心が、他力の信心だろうと思うのです。

サンドイッチというものがありますけれど、あるいは、どら焼きね。中のあんこの美味しいどら焼き、上下で挟むでしょう。どら焼きのあんこを美味しく感じさせるのは、上下の皮である。皮のまずいどら焼きなど食べられたものではない。上下の皮があって、見たところもどら焼き、食べてみてもそう。まあ、比喩ですよ。上の皮と下の皮とに分かれて、中を挟んでいるように、本当は一つのはたらきが二つに分かれている。本願力のサンドイッチが二種の回向となっている。そういうイメージで考えると、少しは考えやすいかなと思うのです。

われわれは自分で生きていると思っていますけれど、実は大地に支えられ、空気があって生きているわけです。下に大地があり、上に空気がある。だからサンドイッチでしょう。われわれは、俺が自分で生きているのだ、俺が教えてやっているのだと思いたいから、とにかく愚かな上に愚かなのですね。われわれは、そんなふうに我執で考えているけれども、本当は、大きなはたらきに包まれて生きているわけでしょう。私は、そのはたらく場所になる。誰でもみんな、その場所になる。それは誰のものにもならない、誰の持ち物にもならない。そういうものを開いて教えてくださったことが、親鸞という人の大きなお仕事ではなかったのかと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2006年3月27日(月)午後6時30分～9時
4月は休講となります。
5月23日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

生み出された人が本願を証明する

親鸞仏教センター所長　本多弘之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第45回と第46回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第45回は、「荘厳菩薩功徳成就」の第二首について、第46回は、同第三首について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第44回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

人を生み出す本願のはたらき

菩薩功徳の初めの言葉は、「安楽国は清浄にして、常に無垢の輪を転ず、化仏・菩薩の日、須弥の住持するがごとし」（『浄土論』『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部）と言います。安楽国は清浄であるのですが、ただ清浄でとどまっているというのではなくて、常に無垢の輪を転ずると。つまり、常に動いている。清浄なる如来の本願が輪の如くに動く。それを「無垢の輪を転ずる」と表現するわけです。

そして、「化仏・菩薩」の「化仏」とは、真仏に対する。浄土の教えで真仏と言えば、阿弥陀如来であり、それに対して化仏は、阿弥陀如来を証明したり、阿弥陀如来を讃めたりする存在です。そうした存在は、すべて仏の意味をもつ。だから、それは諸仏と言ってもよい。そして、仏に成ろうとする人、それが菩薩であって、菩薩と仏とは因果の位が違うわけですが、ここでは、浄土がはたらいて生み出す人のことを、「化仏・菩薩」という言葉で押さえているのだろうと思います。だからその違いを言うよりも、人を生み出すというはたらきを表現しているのだろうと思うのです。

浄土は、空間的に表現される、本願のはたらきをもった場所である。そういうはたらきは抽象的なものではなくて、実は人を生み出している。人において本願がはたらいて、その人が本願を証明する。はたらいている事実を証明するものがなければ、はたらきはないのといっしょです。何かはたらいていることを証明するものがあるから、はたらきがわかる。本願も、本願にふれ、本願を感じて、本願のはたらきがあると思う人間にあるわけです。

法は人によりて重し

仏法には大変大事な言葉があって、『涅槃経』の「四依品」に、「法に依りて人に依らざるべし」（親鸞は『大智度論』から『教行信証』「化身土巻」に引文。『真宗聖典』357頁）と。法に依れと。つまり、人をたよりにすると、真理はどこかで濁る。真理それ自身に依れと。そういう指示がある。人間は、人というものに非常に執着して縛られるところがあるからです。

けれども一方で、曇鸞大師の『浄土論註』で、「なぜ、『浄土論』の初めに婆藪槃頭菩薩造と書いてあるのか」ということを註釈して、「人に因て法を重んずる」（『真宗聖教全書』281頁、大八木興文堂）、法は人によりて重しと、こういうふうに言うのです。つまり、法に依れと言っても、法それ自体がどこかにあるわけではない。法は聞いた人にある。聞いて、主体化して、それを生きている人にあるわけです。

文献に書いてあるからといって、そこに法が

あるわけではない。文字は必ずしも法ではない。法は、文字を読んで、法のはたらきをそこから汲み取った場合に、汲み取った人にあるわけでしょう。誰が読んでも法があるかと言えば、法などありはしない。「漢文だからわからない。日本語に直せ」とよく言いますけれども、日本語に直したらわかるかといったら、わからないのですよ。文献の中身というものは、感じる人間にあって、言葉に直接あるわけではない。言葉が指示する内容を感じ取る人間にあるわけです。もちろん、言葉はその中身を指示していますから、よく読めばあるのですけれども、言葉の表層にあるのではない。だから「義に依りて語に依らざるべし」（『大智度論』『真宗聖典』357頁）という言葉も四依の一つにある。「義」は意味です。語に義があるかといったら、語は義とは限らない。もちろん語を通さなければ、義はないのです。言葉を通して、人間は義をいただくことができる。法と人の関係も、法があればよいといっても、語り伝える人やそれを理解する人がいなければ、法の意味はないのです。

拡大する浄土

安楽国は清浄であって、無数の煩悩の衆生を目当てとしてはたらいていく。そのはたらきが感じられたら、その人が本願を証明し、本願のはたらきを自分の転換において感じて、それを語る。そこに、もう無限に浄土が拡大していく。「浄土が拡大する」というのは、私の師匠の安田理深先生が、晩年に盛んにおっしゃり、拡大する浄土という概念を出されておりました。つまり、新しく、新しく、本願を生きる人が生まれてくる。浄土は無辺際ですから、本当は区域はない。だから拡大するというのも、人間の感ずる空間的表現です。拡大する浄土という言葉で、はたらく浄土を語ろうとされたわけです。

そういうはたらきをいただくと、人が引き受けるのだけれど、人、個人の固執がどこかで破られる。人がやるのではない、法がはたらくのです。徹底的に本願がはたらく。『教行信証』を編集したのは、愚禿釈親鸞ですけれど、すべては、本願のはたらきを語る言葉です。自分の体験を語る言葉などないのです。もっとも全部が自分の体験と言ってもよいのですが、つまり、法のはたらきが主体化されて親鸞聖人の言葉となって語られているのですけれど、個人体験を語っているわけではないのです。

だから「化仏」と言うと、何か化け物みたいなものがどこかにいる、という話ではなくて、あたかもお湯から湯気が沸くように、本願が人を生み出して、いくらでも人が仏という意味をもって現れてくる。こういうことを象徴しているのだろうと思うのです。あたかも須弥山が世界をたもつが如くに、化仏・菩薩が、お日様が無数にあるが如くに、太陽系が無数にあるが如くに、新しく生まれ、そして新しく生まれた人（仏）の周りに、また人が生まれてくる。そういうイメージです。

文字どおりに、神話的表現として考えるなら、どこか遠くに安楽国という国があって、そこには何か光っている仏さまがたくさんいる、そういう表現です。これは、死んだら往く世界のことを語っているわけではないのです。もちろん死んだら往くかもしれません。でも、それはわからない。誰も証明できない。浄土の教えは、単なるフィクションではないのです。もちろんフィクション、物語の意味もあります。けれど、それを通して、願いを引き受ける人を待っているのだと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2006年6月16日㈮午後6時30分～9時
7月28日㈮　同　上
8月29日㈫　同　上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

本願のはたらき

―念々に変わりながら、いまを生きる―

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第47回から第49回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。3回にわたって、『浄土論』の「菩薩荘厳功徳成就」の第三句と第四句について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第46回からその一部を紹介する。　（越部良一）

万劫の初事

『浄土論』の菩薩荘厳功徳の第二は、「無垢荘厳の光、一念および一時に、普く諸仏の会を照らし、もろもろの群生を利益す」（『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）と言います。「一念および一時」、一つの時。二つの時にまたがらない。いまこっちにいて、次の時にあっちに行くというのではなくて、一つの時に、あらゆる世界を照らす。そして「もろもろの群生を利益す」と。ここに曇鸞は丁寧な注釈をつけています。この前の句では、「不動にして至る」（『聖典』289頁）、動かずしてはたらくと、こう言った。けれども、時が違うかもしれない。動かなくても前後があるのだろうと。だから、今度は「一念および一時」、前もない後もないこの一瞬、こういうふうに押さえ直したのだと注釈しております。これは、仏教の時間の問題と絡んで、大変大事な問題だと思います。

曽我量深先生が96歳で亡くなられて、もう35年にもなるのですが、90歳のころ、正月、お祝いに来た方に、「先生、おいくつになられましたか」と聞かれて、「ああ、今年で90だ」と。「それはおめでとうございます」と言ったら、「万劫の初事であります」とおっしゃったと。「劫」というのは、羽衣劫とか、恒沙劫とかの劫です。羽衣劫というのは、一辺四十里の岩を三年に一度、天女が舞い降りて羽衣で撫で、その岩がすり減って無くなるまでの時間をさします。何時になったらすり減るのやら。大体、岩など、いくらすっても、手ぐらいでは減りませんよ。だから、羽衣ですり減って無くなる時間というのですから、気の遠くなるような時間、それが「一劫」です。恒沙劫というのは、ガンジス河の砂の数、それを数えるなどという人はいないのでしょうけれど、その砂の数を数え終わるまでの時間。そういうのが一劫で、それの一万倍が「万劫」です。「万劫の初事です」と、こうおっしゃった。それは、90歳になったから珍しいというのではないのです。生きている一時ひとときが、本当は、万劫の初事なのです。

初めてここに一瞬がある。念々に初めて一瞬がある。われわれはそう思わないのです。昨日があって明日もある、と思っているのです。いまの時が、もう二度とない、この一瞬が全世界と匹敵する重みだなどと思わないでしょう。明日になったらどうだとか、昨日どうしたとか、そんなことばかり考えていますから。けれども、仏法に出遇うということは万劫の初事と、いまの時を感ずるのだと。そう言うのです。そういう内容なのです。この「無垢荘厳の光、一念および一時に」というのは。

信の一念

親鸞聖人も「一念」ということを非常に大事にされます。「行の一念」と「信の一念」ということを言われて、行の一念は南無阿弥陀仏、その一念。南無阿弥陀仏というその行は、本願がわれにはたらく、その相（かたち）です。そこに、信の一念ということを加えた。南無阿弥陀仏が本願のはたらきであると信ずる。その信心自身も如来のはたらきである。それは一念だと。一念は一というけれど、二ある一ではない。だから、一念というのは、「信楽開発（しんぎょうかいほつ）の時剋（じこく）の極促（ごくそく）」（『聖典』239頁）だと。時を截（き）るような時だと。これも言ってみようがないのです、そういう時のことは。

われわれが感じている時間は、チクタクチクタク、今日もあって明日もあってという時間です。ところが、そうではない。もう二度と繰り返すことができない、二度と返ることができない、そういう時を、一時、一時、無量なる内容を孕んだ一時を、いま生きる。こんなことは、われわれには、なかなか起こらないけれど、本願の、南無阿弥陀仏においていただく時というのは、そういう時なのだと。それが「信の一念」だと。こうおっしゃるのです。

それは比喩的に言えば、念々に断崖絶壁の一点に立っているようなものです。われわれは、念々にその一点に立っているなどという危機感を抱かずに生きているのですけれど、でも、質的には、前の一念に死んで、次の一念に蘇（よみがえ）る。念々に変わりながら、いまを生きている。われわれは、何年生きてもそういう重い一念を感ずることがない、情けない凡夫ですけれど、でも、本願に出遇う一念は、そういう質のものなのだと。そういう一念に出遇うと、万劫の初事ですと。そういう時に出遇うということは、いつかどうなるという話ではないのです。いまが無上の時であると、本当に拝める。そういう時が、この「一念および一時」である。

「いま」という言葉を言った途端に、過去になってしまうわけですから、いまというのは、つかまえようとしたらないわけです。つかまえることができないのです、一念は。だから、つかまえられるような時を、破ったような時と言ってもよい。そういう時に出遇わしめるはたらきが、本願のはたらきであり、そういう時に出遇うなら、そこに「普く諸仏の会を照らし」、あらゆる諸仏の会座（えざ）にいってはたらくことができる。普くいけると同時に、一念でいけると。われわれはどっちにもいけないで、動けないで、にっちもさっちもいかないで、ずるずると長い時間を生きながらどうにもならない。それをひっくり返すような語り方なのではないかと思います。

われわれには、動かずしてはたらくとか、一念ではたらくとか、そういうことは何のことやらわからない。でも、本願のはたらきを受けるということは、そういうことなのだと。いわゆる世間の、われわれの世間生活で感じている時間空間、あっちもこっちもあると感ずるような空間、前もあり後もあるというような時間、そういう時間空間を破って、本願のいのちを感じた時の、新しい空間と新しい時間というものの意味を呼びかけてくる。そういうことが、教えの言葉の内容として暗示的に語られていることなのではないかと、私は、そのようにいただいております。　（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、10月31日は、清水 博氏（東京大学名誉教授、「場の研究所」所長）をお招きし、「救済の生命場を求めて―科学と宗教の出会い―」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2006年　9月　　休　会
10月31日㈫午後5時30分～9時
11月17日㈮午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」

浄土―苦悩の衆生のこの場所で、無限大悲のはたらきを感ず―

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第50回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。本講座は、2001年11月から「浄土―濁世を超えて、濁世に立つ―」と題して天親菩薩の『浄土論』をめぐって行われてきたが、このテーマについては、この回をもって最終回を迎えることとなった。

第51回（2006年11月）からは、「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」をテーマに新たな講座が開講された。ここでは、第50回からその一部を紹介する。　（越部良一）

「濁世を超えて、濁世に立つ」

この講座も回を重ねて50回、別に回を定めるつもりはなかったのですが、ちょうどこの『浄土論』の最後の回が、区切りのよい回数になりました。『浄土論』の偈文をとおしながら、「浄土」という問題を、現代という時代において自分がどういただいていけばいいのか、いま、ここに生きていることにとってどういう意味があるのかという関心で、親鸞聖人の「顕浄土真実」、浄土の真実を顕すという、そういう深い要求を少しでも掘り下げてみたい。そういうことがあって、このような場所でお話をさせていただいてきました。

親鸞は、『浄土論』を「正信偈」に取り上げられていて、「光闡横超大誓願」、「闡」には広く開くという意味があって、「横超の大誓願」を広く開示する、そういう内容を孕んでいるのが『浄土論』であると。つまり、『無量寿経』の本願の意味を『浄土論』はあらわしたのだと読んでおられる。次回（第51回）からは、その『無量寿経』をいただいていきたいと思っていますが、『無量寿経』という経典を親鸞聖人はどう読まれたかというと、「如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり」（『教行信証』「教巻」『真宗聖典』152頁、東本願寺出版部）と。本願を説くことが、経の中心問題であり、その具体的な形は南無阿弥陀仏、名号であると。このことを、『浄土論』もまたあらわしているというのが、親鸞聖人の『浄土論』の理解です。

本願は、形なき願いと言いますか、限りない衆生に、限りなく呼びかけて、無限大悲の救いを与えたい。そのときに、その呼びかけ方として、常に光り輝き、いのちが無限であるような如来の名を念ぜよ、思い起こせと。そういう方法を呼びかけて、無限なる願いを内に掘り下げていく道を開いた。浄土は、そういう願心の象徴であって、形なき願いを衆生に呼びかけるための形である。衆生の苦悩に応じて、苦悩なき世界を呼びかけるという形で、浄土をあらわす。

人間の側に無尽蔵の苦悩があるのならば、無尽蔵の功徳として浄土を語ろうとする。ですから相対概念です。この苦悩の生命を完全に克服できるような世界として、この現実の苦悩の生命とは根本的に異質の世界を語りかける。何かこの世とは違う、断絶された世界として語る。だから、浄土は死んでから往くとか、十万億土の彼方であるとかと言われたりもするわけですが、しかし、この呼びかけの意味は、苦悩の生命を捨てて、違う世界に行ったらたすけてあげようというようなことではない。苦悩の衆生のこの場所で、その苦悩の衆生をたすけたい。この世に生きているわれわれの世界を、仏法は「五濁」と言いますが、自分の外側が濁って

いるというような他人事ではなく、まさに濁りの中に生きている。しかしその濁りを逃げずに、その濁りの中にしっかりと立つことができる。そういう原理を、本願はわれわれに呼びかけている。こういうことを話の根に据えて『浄土論』をいただいてみようというのが、「濁世を超えて、濁世に立つ」という題の意味です。

人間の根本問題

そういうことで『浄土論』をいただいてきたわけですが、このようにお話をして、聞いて喜んでくださる方があるのは大変ありがたいのですが、わからないという方も多いのです。いつも思うのですけれど、わからない話をしているのです。わかるように言おうとするのですけれども、言えば言うほどわからない。わかるというのではなくて、何か感ずるのです、本願のはたらきを。本願は、わかって語るのではない。つまり、無限はわからないでしょう、われわれは有限なのだから。でも、単に有限なのではなくて、無限の中にあるから有限なので、無限のはたらきを感ずるわけです。無限のはたらきというのは、いくら語ってもこれはわからないのです。それは、不可解というのではなくて、「不可思議」なのです。不可解というのは、ただ考えてわからないということ。不可思議というのは、考えても絶対わからないけれども、何か感ずるのです。もうちょっと聞きたい、もうちょっとたずねたい、と。その、たずねさせるはたらきが本願なのです。

好奇心であったら、もっと興味のあるものがいっぱいあるでしょう。好奇心には、つまらない話はだめです。こういう話はあまり興味がないのです。でも、人間は気になるのです。根本問題ですからね。根本問題というのは、なかなか触れられないのですけれども、本当にこれに触れると、何かゆったりする。価値観が変わるのです。人間はエリート意識とコンプレックスとで、ぐしゃぐしゃになっているのです。それが解きほぐされて、「そういうものは、人間の根本問題ではないのだ」と、そういうふうに世界が悠々と感じられてくるのです。ですから、ますます窮屈になっていく現代に、一呼吸できる空間が、南無阿弥陀仏の空間なのかなと、そんなふうに思っています。

まあ、この東京国際フォーラムという超モダンな建物、初めは仏法の話をできるような空間ではないかなと思ったのですけれど、こうやってできるのですから、どこでもできるわけです。「仏法のない世界はない」というのは、本当なのでしょう。ただ話し難いとか、なかなか聞いてもらえないということは、もちろん深刻な問題としてあって、比喩的に言えば、耳に栓(せん)をするような時代になっている。みんな耳に何かくっつけて、違うものを聞いている。そして忙しい時代、走り回っている時代ですから、じっくりと宗教問題、自己の根本問題を、一日１分でも憶念するということができなくなっている。でも、南無阿弥陀仏は、そんなに時間は要(い)りません。ふっと思い立って、そこに還(かえ)っていく世界を感ずるのです。方法として、座禅のように足も痛くなりませんし、お腹も減りませんしね。ただ、聞き難いのです。意味がわからない。これは、聞いていただくしかないのです。これをご縁に、また根本問題に、一人でも触れていただけたらと、切に思うことです。

（文責：親鸞仏教センター）

※講座記録は、『現代と親鸞』第12号に掲載予定。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

2006年11月から、新テーマ「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」がスタートしました。どなたでも聴講（無料）いただけますので、ご参加ください。

記

日時：2006年12月15日㈮午後6時30分～9時
　　2007年　1月16日㈫　　同　上
　　2月15日㈭　　同　上
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
　　JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩１分
参考図書：『真宗聖典』（東本願寺出版部発行）
　　ご希望の方は、下記まで。
　　TEL 075-371-9189　FAX 075-371-9211
　　https://books.higashihonganji.jp